HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	情報戦争としての日露戦争（５・完）　－参謀本部における対ロシア戦略の決定体制１９０２～１９０４年－
Author(s)	佐藤, 守男
Citation	北大法学論集, 51(4), 53-122
Issue Date	2000-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/15026
Type	bulletin (article)
File Information	51(4)_p53-122.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

情報戦争としての日露戦争（五・完）

――参謀本部における対ロシア戦略の決定体制　一九〇二年～一九〇四年――

佐藤守男

目次

はじめに
第一章　日本陸軍と日英軍事協商
第一節　日英軍事協商の成立契機

第二節　日本陸海軍の基本的交渉方針
第三節　日英軍事協商の成立
第二章　日本陸軍の対露情報活動
第一節　参謀本部
第二節　情報収集組織
第三節　情報収集
第三章　開戦前の対露情況判断
第一節　参謀本部の対露情報資料
第二節　参謀本部の対露情報見積り
補　章　開戦前のロシア陸軍
終　章　情報活動の日露比較―むすびにかえて―
第一節　観戦武官団
一　外国観戦武官
二　情報活動の評価
第二節　ロシア陸軍省の情報活動
一　陸軍省の機構
二　日露開戦前のロシア軍情報組織
第三節　クロパトキン将軍
一　情報収集
二　対日情報見積り

（以上、五〇巻六号）
（以上、五一巻一号）
（以上、五一巻二号）
（以上、五一巻三号）

〔参考〕

Ⅰ　史料

一「日英連合軍大作戦方針」
二「竜動會議始末報告」
三「日英軍事協商に関する参謀総長意見書」
四「応聘将校下士心得」
五「海外派遣者報告規定」
六「将校下士ニシテ外国ニ招聘セラルル者ノ手続」
七「別表　八　露国戦時兵力概見表」
八「別表　九　黒龍軍管及関東州配兵表」
九「別表　十　黒龍江軍管及関東州各地方戦時兵力概見表」
十「別表十一　西伯利軍管区配兵表及戦時兵力概見表」
十一「別表十二　黒龍軍管区・関東州配兵表」
十二「別表十三　絶東派遣豫定露軍一覧表」
十三「別表十四　極東露国重要職員姓名一覧表」

Ⅱ　資料

一　英国陸軍諜報局関係資料
二　満州・朝鮮各全図

（以上、本号）

終　章　情報活動の日露比較
――むすびにかえて――

本章では、日露開戦前における情報活動および決定体制について日露両陸軍を比較考察する。もちろん情報戦争の優劣、および決定体制の比較は、ロシア側の史料上の制約と事柄の性格から客観的な指標を提示して論ずることは著しく困難である。そこで本章では、ロシア陸軍に従軍し、その活動を内側から見た英国と米国の観戦武官、後世のロシア歴史家、および日露戦争期のロシア陸軍の司令官であったクロパトキン将軍の三者の判断を手掛かりとして、検討をすすめることとする。そして最後に、日露開戦前の情報戦争における日露間の優劣を考察して、「むすび」にかえる。

第一節「観戦武官団」では、日露戦争時に英国陸軍からロシア陸軍に派遣された三名の観戦武官の一人であったウオータス大佐（COL W.H.H.Waters）の従軍報告に基づき、外国武官の目に映ったロシア陸軍の対日情報活動に関する客観的評価を検討する。そして、日露両陸軍の情報活動を対比させる。本節の主たる使用文献は、英国参謀本部が日露戦後に編纂した観戦武官報告である。

第二節「ロシア陸軍省の情報活動」では、ロシア陸軍省機構の歴史的変遷を概観する。そして、開戦前におけるロシア陸軍の情報組織を検討する。その中で、特にロシア陸軍の中枢をなす参謀部における組織形成の過程を明らかにする。そして、それが極めて複雑な機構になっていることを取り上げて検討する。即ち、開戦前におけるロシア陸軍の参謀本部は、陸軍大臣の幕僚機関である総参謀部の中に含まれていたということである。本節で使用するロシア側の文献は、モスクワ大学教授であった歴史学者P・ザイオンチコフキー（一九〇四－一九八三、P.A.Zaionchkovskij）および旧ソ連邦科学アカデミー歴史学研究所教授L・ベスクローブヌイ（?～一九八六、L.G.Beskrovnyj）による一九世紀末から二

○世紀初頭におけるロシア陸海軍に関する著作、満州軍司令官クロパトキン将軍（一八四八～一九二五、General Kuropatkin）回想録、I・ジェレビャンコ（I.V.Derevyanko）による日露戦争時の諜報戦に関する著書などである。

第三節「クロパトキン将軍」では、主として満州軍司令官であった同将軍の回想録に基づいてロシア陸軍総参謀部の情報収集と対日情報見積りを検討する。そして、ロシア陸軍の対日認識を考察する。その中で、ロシア陸軍首脳部が日本陸軍の戦闘準備態勢を、いかに過少評価していたかについて検討する。本節で使用する主要文献は、上述したジェレビャンコの著作のほか、ウイッテ伯回想記などである。

第一節　観戦武官団

本節では、外国観戦武官を取り上げる。その理由は、それら観戦武官の従軍報告の一部から、ロシア陸軍の情報活動に関する客観的評価を検討するためである。

特に、英国陸軍からロシア陸軍シベリア第一軍団に従軍したと思われるウォータス大佐の武官報告を考察する。同大佐は唯一、その報告の中で、ロシア陸軍総参謀部の開戦前における情報活動を指摘しているからである。

一　外国観戦武官

日露戦争では、欧米諸列強を含む各国の軍隊から派遣された観戦武官が、まるで満州の曠野において展開された一大模擬戦の見学者のように、日露両軍の攻防戦をつぶさに実視し、本国へおびただしい報告書を送っている。(1) ロシア満州

軍司令官クロパトキン将軍は観戦武官について回想録の中で、ロシア側から観戦した外国人武官の特徴を、次のように述べている。(2)

「わが軍に従軍した諸外国武官は、ほかの誰よりも冷静な立場で、戦闘状況に正当な評価を加えることが出来た。武官の多くは粒よりの将校で、わが軍と共に苦難と危険を分かち合い、わが軍を愛し、相互に敬愛されていた。しかし、武官報告の内容を知る術がない」

それにもかかわらず、諸外国武官の存在は、やっかいなものであった。極東軍総司令官付参謀本部参謀次長オラノフスキー少将は一九〇五（明治三八）年九月一日付けの報告書の中で、次のように諸外国武官に対する厳しい内容を書き送っている。(3)

「諸外国武官が軍事行動戦域に入ることは望ましくない。武官団を後方に配置すれば、多くの苦情と不満を招くことになるし、部隊に配属すれば尚更、危険である。そして、外国武官にかかわる悲しむべき事件が若干確認されている。

(一) ある武官は、他の諸外国武官やわが将校団の面前で、無神経な態度をとった。

(二) 他の武官は、禁止されている情報収集を摘発された。

(三) 二名の武官は、二月二五日の奉天撤退時に捕虜となり、後日判明したところによれば、日本軍に最も重要な軍事機密を提供した」

日本軍は当初、同盟国にあった英国の観戦武官を含め、その行動を厳しく制約した。日本の第一軍（黒木大将）に英国陸軍観戦武官として従軍したハミルトン中将は満州軍総司令部第二課長福島少将について「彼は文字通り、諸外国武官や外国通信特派員に対して羊の衣服をつけた狼であった」[4]と、その不満を表現している[5]。観戦武官の存在は交戦両軍にとって、大きな負担になったようである。

米国の研究者グリーンウッドによれば、日露戦争における主要国観戦武官の概数は、下表の通りである[6]。

なお、英米両国は戦後、各観戦武官報告を整理して公刊している[8]。それらの内容は主として、各会戦における戦闘詳報であるが、雑報欄には、ロシア軍捕獲文書など貴重な史料[9]が含まれている。特に、米国参謀本部が、日露両軍の野戦衛生に多大の紙幅を割いていることは注目に値する。

派遣国	日本軍	ロシア軍
イギリス[7]	22	3
アメリカ	13	10
ドイツ	3	5
フランス	3	4
ハンガリー	2	2
スイス	2	1
ブルガリア		2
チリ		2
イタリア	1	1
ルーマニア		2
スペイン		2
スウェーデン	1	1
アルゼンチン		1
ノルウェー		1

※1904（明治37）年7月20日現在、陸軍武官は25ヵ国、海軍武官は6ヵ国から満州に派遣されていた。

（1）在外公使館付陸海軍武官が正規の常駐武官であるのに対し、観戦武官は、外交ルートを通じて交戦両国の承諾のもとに従軍した戦時のみの臨時武官であった。その主任務は、従軍野戦軍の兵力組成、兵站をはじめ、各会戦の戦闘詳報（periodic operational report）を記録・報告することにあった。そして、観戦武官には諸外国陸海軍のエリート将校が選抜・派遣された。

この制度の発祥は不明であるが、わが国では、幕府が一八六四（元治元）年、プロシヤ・オーストリアとデンマークと

の戦争に榎本武揚（幕臣、のち明治政府で逓信、農商務、文部各大臣歴任）を、観戦武官として派遣している。日本参謀本部は日清戦争（一八九四［明治二七］年）の際、英国陸軍観戦武官二名の従軍を認め、一方、英国陸軍はボーア戦争（一八九九［明治三二］年）時、日本陸軍武官二名の観戦を受け入れている。

(2) General Kuropatkin, *Zapiski Generala Kuropatkina o Russko-Yaponskoj Vojne* (Berlin,1909), p.12.

(3) I.V.Derevyanko, *Tajny Russko-Yaponskoj Vojny:Russkaya Razvedka i kontrrazvedka v Vojne 1904-1905* (Moskva,1993) ,p.228.

(4) 井口参謀本部総務部長の開戦当初の備忘録によれば、「凡テ外国人ハ福島少将取扱ノ事、独仏人モ」と記録されている（井口省吾文書研究会編『日露戦争と井口省吾』［原書房、一九九四年］四六九頁）。従って、諸外国の観戦武官はすべて福島少将の指示に基づき、その行動が制約され、同盟国の英国陸軍将官と言えども例外ではなかったようである。福島がいかに対情報（秘密保全）に徹底していたかを物語っている。

(5) Ian Hamilton, *a Staff Officer's Scrap-Book during the Russo-Japanese War* (London,1907), Vol.I, p.32.

(6) John T.Greenwood, "The American Military Observers of the Russo-Japanese War (1904-1905)", *Doctoral Disertation* (Kansas State University,1971), 110.

(7) 英国陸軍は将官三名を含む大観戦武官団を、日本の在満州野戦軍に従軍させた。それは、一九〇二（明治三五）年七月に締結された日英軍事協約書の趣旨に則った措置であった。日本政府は戦後、一九〇五（明治三八）年一〇月に英国をはじめ独仏など諸外国の従軍武官に対する叙勲を上奏し、裁可されている。これらの叙勲は、外国交際の一環として「外国人叙勲内則」（一八八八［明治二一］年一一月一九日閣議決定）に基づいて行われたものである（梅渓昇編『明治期外国人叙勲史料集成・別巻』［思文閣、一九九一年］五八頁）。英国陸軍観戦武官名簿および叙勲一覧は、次の通りである。

ア　日本陸軍　　合計二二名

(ア)　第一軍（黒木大将）　六名

- LTG　Sir Ian Hamilton　（勲一等瑞宝章）
- COL　R.B.Aleson　（勲三等旭日章）
- LTC　C.V.Hume　（勲三等瑞宝章）
- LTC　G.H.Fork　（同右）

- CPT B.Vincent（勲四等瑞宝章）
- CPT J.B.Jardine（同右）

(イ)

第二軍（奥大将）　八名

- LTG Sir W.G.Nicholson（勲一等旭日大綬章）
- COL J.W.G.Tulloch（勲三等旭日章）
- LTC A.L.Haldane（勲三等瑞宝章）
- LTC E.Agar（同右）
- LTC W.G.Macpherson（同右）
- MAJ R.W.Bodger（勲四等旭日章）
- CPT A.H.S.Hart-Synnot（勲四等瑞宝章）
- CPT R.T.Talk（同右）

(ウ)

第三軍（乃木大将）　八名

- LTG Sir C.J.Burnett（勲一等瑞宝章）
- COL W.H.Birkbeck（勲三等旭日章）
- COL W.Apsley Smith（同右）
- MAJ G.E.Pereira（勲四等旭日章）
- MAJ C.M.Crawford（同右）
- CPT C.A.L.Yate（勲四等瑞宝章）
- CPT Sir A. Bannerman Bart（同右）
- CPT D.S.Robertson（同右）

イ　ロシア陸軍　合計二名(2)

- LTG Sir M.Gerard
- COL W.H.H.Waters

• MAJ J.M.Home

注

(1) 梅渓昇編『明治期外国人叙勲史料集成・第四巻』(思文閣、一九九一年)二二八頁。

(2) Thomas G. Fergusson, *British Military Intelligence, 1870-1914* (London,1984), p.214.
なお、米国の観戦武官は日本からの叙勲の申し出を辞退している。

(8) • Great Britain. War Office, *The Russo-Japanese War:Reports from British Officers Attached to the Japanese and Russian Forces in the Field* (London,1908), Vol.I～III.
• War Department, *Reports of Military Observers attached to The Armies in Manchuria during The Russo-Japanese War* (Washinggton,1907), Part I～V.

(9) 混成コーカサス・コサック師団長カルツェフ (Kartsev) 少将署名の「日本軍戦術に関するメモ」(捕獲文書)、ロシア軍に配付されたクロパトキン満州軍司令官の指令書 (日本軍の戦術) など、日本軍との交戦時に着目すべき戦術上の要領を解説した参考資料が含まれている (Great Britain. War Office, *The Russo-Japanese War:Reports from British Officers Attached to the Japanexe and Russian Forces in the Field* [London,1908], Vol.II. p.487.)。

二　情報活動の評価

観戦武官は通常、一方の側の軍隊に従軍し、その敵方となる他方の側の軍隊を観察する機会はない。しかし、英米の観戦武官の中には、日露両軍を比較する機会に恵まれたものが存在した。英国のウォータス大佐と米国のジャトスン大尉である。

わが同盟国の英国陸軍省は日露戦争の観戦武官として、ロシア陸軍へ中将、大佐および少佐各一名を従軍させている。

ロシア陸軍に好意的であったジェラード中将（Sir M.Gerard）を筆頭に、かってサンクト・ペテルブルクで駐在武官勤務の経験をもつウォータス大佐（W.H.H.Waters）およびホウム少佐（J.M.Home）の三名で、いずれも、英国将校団の大部分がそうであったように、ロシア軍の勝利を予測しての従軍であった。[1]

そのうち、ジェラード中将は戦後、本国への帰途、シベリアで客死したため、戦争に関するすべての観戦記録が紛失した。[2] ウォータス大佐とホウム少佐の従軍報告書は一九〇八（明治四一）年、英国参謀本部によって公刊され、貴重な史料を提供している。[3] このうちウォータス大佐は、日英同盟の締結された一九〇二（明治三五）年、日本を訪問し、日露両軍の比較検討を行っていた。その時点でのウォータス大佐の結論は、「ロシアが日本に勝つ」というものであった。[4] そして、日露戦争後に刊行された二三〇頁を越えるウォータス大佐の報告には、得利寺（一九〇四〔明治三七〕・六・一四～一五）、遼陽（一九〇四〔明治三七〕・八・三〇～九・五）、沙河（一九〇四〔明治三七〕・一〇・一一～三〇）各会戦の戦闘詳報をはじめ、「日露戦争の体験に基づく総合報告」（General Report on the Experiences of the Russo-Japanese War）と題する弾薬・装備、兵站、後方勤務など四五項目にわたる詳細な内容が記述されている。

ウォータス大佐は、その総合報告の第二三項で、「情報（軍事）と偵察」[5]（Intelligence〔Military〕and Reconnaissance）を取り上げている。そこで以下、その内容に検討を加えたい。

「日本軍に関する情報について言うべきことはほとんどない。何故なら、ロシア軍はひどい情報しか持っていなかったからだ。従って、このことをできるだけ何も言わないのが、ロシア軍への思いやりというものだ。私が頼りにしていた司令部の参謀や他のロシア将校達は皆、こういうように言ったものだ。彼らの誰もが言うには、中国人のスパイが彼らにとっての主な情報源であった。中国人は雇い主に忠実ではあったが、その情報は全く信頼できなかった。それは東

洋的な心理作用によるもので、相手が受け入れやすいことを言うのを好むのだ。そして、数字には大雑把であった」以上のようにウォータスは、他の特徴についてはロシア軍に好意的な見方をしながら、情報については酷評を加える。さらに続けて、

「戦争が勃発する前、サンクト・ペテルブルクの総参謀部は、日本軍が野戦に投入し、維持することが出来る部隊の質と兵力に関してめちゃくちゃな情報しか持っていなかった。あまりに見当違いであったのは、ロシア軍首脳部が一九〇四（明治三七）年一一月末頃まで、日本はフランスの人口より多いにもかかわらず、日本軍は、せいぜい三〇万から四〇万人位が最終的な限界との見解に固執したことだった。遼陽から奉天に撤退した後で、一人の将軍が九月一一日に私に話してくれた。日本軍は、もうこれ以上兵士がいないし、既に一〇万人の部隊を失ったと。私は答えた。貴官の言われることは本当かもしれないが、日本では、法律によって何年も徴兵がなされてきた事を考えると、新しい年度の出征軍を直ぐに準備されるだろうと」

シベリア第一軍団（シュタケルベルク中将）に従軍していたと思われる英国陸軍武官ウォータス大佐は上述した報告の中で、彼自身もまた、「日本軍の戦闘能力をとんでもないほど低く評価した大馬鹿の一人だった」と回想しているが、それにも増して、同大佐は、ロシア陸軍総参謀部（Great General Staff）の開戦前における対日情報活動が異常なほど欠如し、無知であった点を、次の三点に絞って厳しく指摘している。

(一)　主要な情報源は、信頼できない中国人である。

(二)　総参謀部の対日情報見積りは、甚だしい過小評価であった。

㈢　軍首脳部は、日本軍の兵力を最大三〇～四〇万人とみていた。

ウォータス大佐の報告は、後に述べるクロパトキン将軍の回想録の内容を裏付ける史料としても貴重であり、開戦前におけるロシア陸軍の対日認識を取り上げた唯一の観戦武官報告でもある。

一方、日本の満州野戦軍第二軍（奥大将）に従軍した英国陸軍武官ホールデイン中佐（A.L.Haldane）は戦後の一九〇九（明治四二）年三月、「日露の情報組織」（Japanese and Russian Intelligence Systems）と題する講義録[6]を残している。その中で、ホールデイン中佐は、開戦前におけるロシア陸軍の情報活動に関する資料不足を指摘しながら、次のように述べている。

「平時におけるロシアの諜報は良く整備されていたが、満州における戦争については失敗であった。その理由の第一は、日本軍の諜報組織と異なり、現地におけるロシアのスパイ活動のための拠点作りが軽視されたことである。第二に、野戦軍情報部は、一定の情報収集計画を作成していなかった。第三点として、当該情報幕僚たちはすべての活動に関し、無能な中国人通訳に依存せざるを得なかったということである」

また、戦闘情報収集組織については、日露両軍の英国観戦武官団が報告しており、その多くは日本陸軍の優れた敵情把握を指摘している[7]。

米国陸軍からの観戦武官団のうち、ジャトスン（W.V.Judson）陸軍工兵大尉は一一ヵ月間にわたり、主にロシア第四軍団に従軍し、クロパトキン将軍の指揮するロシア軍司令部をつぶさに観察した。そして奉天会戦に出会って日本軍の

捕虜となり、大山元帥指揮下の日本軍総司令部にわずか二日間であるが、滞在し、大山、児玉、福島と会う機会を得ている。ジャトスン大尉は帰国後、両軍、両司令部を比較する報告書を書いている。その中でジャトスンは、両司令部を比べ、ロシア陸軍の司令部は権限と情報が過度に中央集権化され、状況の変化に対応しえない硬直性を示しているのに対し、日本陸軍は、権限と情報が適切に配分され、柔軟に状況に対処する「美しい成果」を挙げていると判断している。そして日露両軍の比較検討から両軍の準備態勢（preparedness）の差を引き出し、また、それを最も重要なこの戦争の教訓と述べている。(8)

米国海軍からロシア陸軍に派遣されたマッカリー海軍少佐（Newton A.McCully）は一九〇四（明治三七）年五月四日、日本第二軍（奥大将）の遼東半島東部沿岸への上陸作戦を実視し、ロシア陸軍の情報欠如と無計画な防御作戦に批判を向けている。(9)

このように、観戦武官の目に映ったロシアと日本軍の情報活動および決定体制の優劣は、明瞭に日本が優位していたのである。

（1）Thomas G.Fergusson, *British Military Intelligence, 1870-1914* (London,1984), p.214.
（2）*Ibid.*
（3）Great Britain. War Office, *The Russo-Japanese War : Report from British Officers Attached to the Japanese and Russian Forces in the Field* (London,1908), Vol.III.
（4）Philip Towle, "The British Armed Forces and Japan before 1914", *Army Quarterly*,68.

(5) Great Britain. War Office,*op.cit.*,p.155.
(6) A.L.Haldane, "Japanese and Russian Intelligence Systems" (WO 106/6150, Public Record Office, London, 1909).
(7) Thomas G.Fergusson,*op.cit.*,p.183.
(8) John T. Greenwood, "The American Military Observers of the Russo-Japanese War (1904-1905)", *Doctoral Disertation* (Kansas State University), 223～224, 414～415, 489.
(9) Newton A. McCully, *The McCully Report:The Russo-Japanese War 1904-1905* (Maryland, 1977), p.46.

第二節　ロシア陸軍省の情報活動

本節では、日露開戦前におけるロシア陸軍省における基本的機構を明らかにする。そして、ロシア陸軍の中枢をなす総参謀部の組織形成について概観する。その中で、特に陸軍総参謀部と参謀本部との組織上における複雑な関連性を考察する。

次に、ロシア陸軍総参謀部における情報組織を検討する。

一　陸軍省の機構

日露戦争期におけるロシア陸軍省の情報活動および決定体制がどのようなものであったかを検討するためには、まず陸軍省の機構の基本的骨格を明らかにする必要がある。それにはオブルチェフ総参謀長の機構改革案が手がかりとなる。

ロシア陸軍の参謀本部は、陸軍大臣の幕僚機関である総参謀部の中に含まれていた。その総参謀部に関して、一八九四（明治二七）年、オブルチェフ総参謀長は改編案を起草し、左記五項目の検討を提起した。[1]

(一) 戦争戦域における部隊配置
(二) 軍の教育訓練
(三) 軍の集中および初期行動計画の策定
(四) 国境隣接軍管区における野戦運用の準備
(五) 想定敵国の情報収集組織

オブルチェフの狙いは総参謀部に対し、高度な戦略構想の処理能力を付与することにあったようである。しかし、オブルチェフは総参謀部を陸軍省から独立させ、皇帝直属の参謀本部に統一・昇格させることを意図していなかった。ミリューチン前陸相が確立した運用組織の充実が目的であったものと思われる。オブルチェフ提案の中で、情報収集組織の整備がはじめて指摘されており、注目される所である。ロシア陸軍は、この時点で有効な情報機関を確立していなかったことがうかがえる。

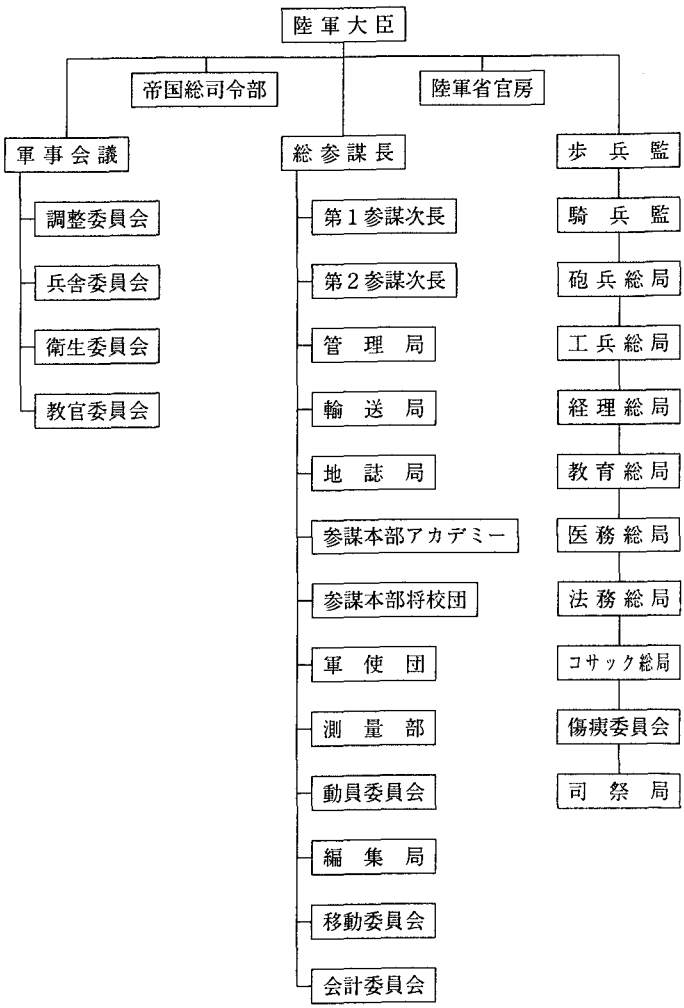
バンノフスキー陸軍大臣は、オブルチェフ提案検討委員会を発足させるが、具体的な成案を得るまでには至らなかった。バンノフスキーおよびオブルチェフ両将軍が一八九七（明治三〇）年に退役したからである。[2] それらの後任として、クロパトキン陸相[3]とサハロフ総参謀長が任命され、両者が日露開戦前のロシア陸軍を指揮したのである。クロパトキン陸軍大臣は一九〇〇（明治三三）年三月、オブルチェフ提案に基づいて「総参謀部規則」を策定し、同規則はニコライ

二世の裁可を得て、一九〇三（明治三六）年に発効した。[4] 日露開戦前における陸軍省の組織図は、別図1の通りである。[5]

なお、組織図における主要部分の概要は、補章・二「部隊運用」において記述した。[6]

別図1

陸軍省組織図
（1903〔明治36〕年）



(1) L.G.Beskrovnyj, *Russkaya Armiya i Flot v XIX Veke* (Moskva,1973), p.206.
(2) *Idid.*
(3) A.クロパトキン（一八四八～一九二五）。陸軍大将、露土戦争（一八七七～一八七八）従軍、中央アジア転戦（一八八一）、日露戦争直前まで陸軍大臣、満州軍司令官（一九〇四・二～一〇）、極東軍総司令官（一九〇四・一〇～一九〇五・三）、第一満州軍司令官（一九〇五・三）、国家会議委員、北部方面軍司令官（一九一四）、トルケスタン将官総督（一九一六～一九一七）（I.V.Derevyanko, *Tainy Russko-Yaponskoj Voiny:Russkaya Razvedka i Kontrrazvedka v Vojne1904-1905* [Moskva,1993], p.320)。
(4) Beskrovnyj,op,*cit.*,p.206.
(5) *Ibid.*
(6) P.A.Zaionchkovskij, *Samoderzhavie i Russkaya Armiya na Ruvezhe XIX-XX Stoletii 1881～1903* (Moskva,1973), p.89.

二　日露開戦前のロシア軍情報組織

すでに述べたように、日露開戦前における陸軍省総参謀部の組織は、一九〇三（明治三六）年発効の「総参謀部規則」に準拠している（別図1参照）。この規則が皇帝裁可から三年も遅れて発効した理由は、財政上の困難によるものであった。[1] 総参謀部内における参謀本部の組織を明確に記述した文献は見当たらない。従って、「総参謀部規則」および「参謀総長規則」（一九〇五［明治三八］年六月）の内容を援用し、参謀本部の機能を、次に記述する。

(一)　第一参謀次長局

総参謀部の中核として、参謀本部将校団が二部に分かれて勤務し、第一部は戦争全般計画、要塞の配置、部隊編成および部隊訓練を所掌した。第二部がアジアおよびカフカス方面における軍民運用を担当した。

(二) 第二参謀次長局

第一次長局同様、第一部は予想戦域の研究、情報収集および作戦計画を策定し、第二部が動員計画を立案した。

(三) 管理局

第一部は兵員見積り、叙勲、任免および昇任など人事問題を、第二部が経理をそれぞれ担当した。

(四) 砲兵、工兵、経理、教育、医務、法務およびコサックの七コ総局がそれぞれの正面業務を負担した。

(五) 参謀本部アカデミーおよび参謀本部将校団

前者は参謀将校の養成機関であり、後者が参謀将校の分限を掌握した。

以上の各局等が参謀本部の機関として機能していたものと考えられる。このように見る限りでは陸軍省総参謀長を、参謀総長に置き換えることが可能である。しかし、日露開戦前における総参謀長は、飽く迄も陸軍大臣の幕僚長であった。

上述のように、一九〇三（明治三六）年発効の「総参謀部規則」によれば、陸軍省総参謀部第二参謀次長局第一部が日露開戦前、国外情報活動を所掌していた。その細部組織は不明であるが、第一部内に軍事統計課が置かれ、同課は七コ班以上に分割され、さらに各班が複数の係を隷属させていたようである。[2] 軍事統計課第七班の業務は、次の通りであった。

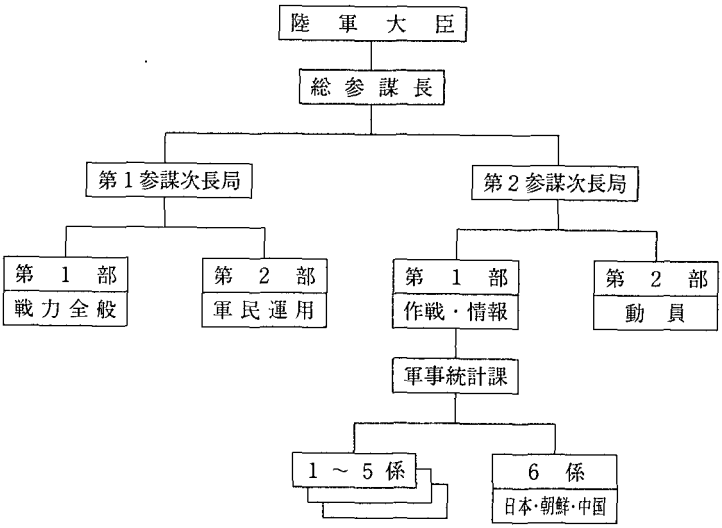
(一) 諸外国軍事統計資料の収集、処理および配付

(二) 軍事諜報関係の連絡
(三) 諜報将校の派遣
(四) 軍事に関する重大な考察の研究

なお、極東（日本、朝鮮、中国）担当は第七班第六係（stol:desk）であった。第六係の陣容は明らかではないが、組織構成上から類推しても、その規模は、極めて貧弱なものであったと言わざるを得ない。ロシア陸軍の日露開戦前における情報収集組織図を別図2に示す。

別図2

ロシア陸軍情報収集組織図
（日露開戦前）



※この組織は1905（明治38）年6月「参謀総長規則」に基づき、新設の「参謀本部」に吸収される。

中央の情報収集活動とは別に、隣接諸外国の情報収集任務が各軍管区司令部の統計課に課せられていたが、陸軍省からの情報収集計画もなく、さらに乏しい予算[3]が各軍管区の諜報活動を阻害していた[4]。陸軍省総参謀部は日露開戦まで年間、約五万六〇〇〇ルーブル（時価約四億五〇〇〇万円[5]）の諜報機密費を受領し、各軍管区に四〇〇〇ルーブル（時価約三二〇〇万円）から一万二〇〇〇ルーブル（時価約九六〇〇万円）を配分した[6]。このほか、第二参謀次長局第一部軍事統計課は年間、諜報費として約一〇〇〇ルーブル（時価約八〇〇万円）を受け取っている。因に、日本は対露戦に備え、軍事諜報活動経費として約一二〇〇万ルーブル（時価約九六〇億円）を計上した[7]。わが国の諜報機密費の支出期間および使途等が不明であるため、日露両国の比較は困難であるが、仮に支出期間を開戦前五年間と仮定した場合には、日本参謀本部の諜報活動費は、ロシア陸軍のそれを四〇倍強も上回っていたことになる。わが国参謀本部が日露開戦に向けて、いかに情報収集活動に力点を置いていたかを知る興味深い資料の一つである。

対日情報収集活動において主要な役割を果たしていたのが諸外国同様、駐日公使館付陸軍武官であった。しかし、日本における秘密諜報活動組織は、開戦直前まで全く存在していないかった[8]。

その理由の一つはロシア陸軍武官等の日本語に対する無知にあった[9]。参謀本部アカデミーに併設された東方語学コース修了者は一九〇三（明治三六）年度、わずかに三名であった[10]。一八九八（明治三一）年三月二一日付けの駐日公使館付陸軍武官報告は次のような内容を、第二参謀次長局へ書き送っている[11]。

「漢字は、日本の軍事機構調査のために派遣された陸軍武官の活動にとって、最も深刻な障害である。この暗号にも似た表記法がたまたま、獲得した情報源の利用を不可能にし、日本人通訳の良心に依存する以外に方法がない。陸軍武官の立場は正に悲喜劇的である。総参謀部は、日本語原稿に含まれている重要かつ貴重な情報資料の入手を命令し、総

参謀部において入手原稿の内容を知る方法が秘密保全上、その原稿をペテルブルクへ送り、日本語の出来る唯一の同志に読解してもらう以外にないということである」

一八九八（明治三一）年、駐日公使館付陸軍武官として、前年までの陸軍大臣を父に持つB.バンノフスキー大佐が任命され、一九〇三（明治三六）年に離日している。[12] 同大佐は約五年間、秘密諜報活動のネットワークもなく、日本語も解らない状況の中で、活躍の場を失ったようである。第二参謀次長は武官報告の減少と戦略的価値の低い情報資料の通報などを理由に、武官の更迭に踏み切り、後任にV.サモイロフ参謀中佐を日本へ送った。[13] 同中佐も又、前任者同様、大きな成果をあげることもなく、一九〇三（明治三六）年五月二四日付けの、次のような武官報告を、総参謀部へ宛てている。[14]

「日本陸軍の組成に関するすべては機密に属し、何らかの情報資料に接するのは正に偶然である。諸外国武官からの入手情報も信頼し得るものは何もない」

以上のように、情報組織としての駐日ロシア陸軍武官の活動は開戦前、極めて低調であった。[15] それが後日、戦争の帰趨に破滅的な形で反映されることになるのである。

(1) L.G.Beskrovnyj, *Armiya i Flot Rossii v Nachale XX V.* (Moskva, 1986), p.49.

(2) I.V.Derevyanko, *Tainy Russko-Yaponskoj Vojny: Russkaya Razvedka i Kontrrazvedka v Vojne 1904-1905* (Moskva, 1993), p.319.
(3) S．ウィッテ（一八四九ー一九一五）は一八九三（明治二六）年から一九〇三（明治三六）年まで大蔵大臣に在職し、軍事予算の大幅削減を実行した（Derevyanko, *op.cit., p.319.*）。
(4) Derevyanko, *op.cit.*, p.148.
(5) 一ルーブルは一円五銭三厘であった（『太陽』明治三五［一九〇二］年一〇月五日発行、第八巻一二号、二二四頁）。なお、当時の一円は現在の約八〇〇〇円に相当する（稲葉千晴『明石工作』［丸善ライブラリー、一九九五年］二六頁）。
(6) Derevyanko, *op.cit.*, p.319.
(7) *Ibid.*
(8) *Ibid.*, p.149.
(9) *Ibid.*
(10) P.A.Zaionchkovskij, *Samoderzhavie i Russkaya Armiya na Rubezhe XIX-XX Stoletii 1881-1903* (Moskva, 1973), p.320.
(11) Derevyanko, *op.cit.*, p.319.
(12) *Ibid.*, p.149.
(13) *Ibid.*, p.150.
(14) *Ibid.*, p.151.
(15) *Ibid.*

第三節　クロパトキン将軍

本節では、主としてロシア陸軍の最高責任者であったクロパトキン将軍の回想録を手掛かりとして、まずロシア陸軍

総参謀部の情報収集について検討する。

そして最後に、同総参謀部の対日情報見積りを取り上げる。その中で日露開戦前、帝政ロシアにおける要路の高官をはじめ、ロシア陸軍首脳部が日本陸軍の戦闘力を、いかに過小評価していたかについて考察する。

一　情報収集

クロパトキン満州軍司令官は、情報収集に対する取り組み方について、その回想録の中で「日本は軍事力を拡大すると共に、他の分野でもロシアとの戦争に対処した。多くの日本軍人がロシアを含むヨーロッパにおいて軍事の研究調査に従事した。満州戦域は極めて綿密に踏査された。通信網が至る所に張り巡らされ、日本軍将校はわが軍の調査を目的として、わが極東において最も低い職責に殉じ、多大の成果を達成した。それに引替え、わが駐日武官団は、日本において日本人を侮蔑しているだけであった」として、日露両軍を対比させている。(1)

ロシア陸軍総参謀部は、特殊な極東戦域における秘密諜報機関の組織作りに無関心であった。(2)そのため、平時における軍管区司令部の諜報活動も又、消極的であった。(3)軍管区司令部には専門の諜報将校が配置されておらず、地方住民を対象とした諜報員養成所も存在していなかったのである。(4)

クロパトキン将軍はこの点について、次のように述懐している。(5)

「日本参謀本部がロシア陸海軍の兵力調査のために数多くの秘密工作員を、極東地域へ送り込んでいたのに対し、わが総参謀部は日本軍兵力に関する情報収集を、参謀将校のみに一任していた。さらに又、それら参謀将校の人選が不適

切であった」

日本参謀本部は、開戦前のかなり以前から満州に諜報組織を創設して要員養成に取り組み、営口（インコウ）と錦州（チンチョウ）には中国人密偵の特殊養成機関が存在した。[6] ロシア側が同様な機関を組織するのは、一九〇五（明治三八）年五月、漸く戦争の末期であった。[7]

開戦初期、クロパトキン満州軍司令官は陸軍総参謀部の情報収集に関する無関心な対応について、次のように書いている。[8]

「敵情の収集、捕虜尋問および秘密諜報機関の組織を含む情報部の指揮は、その円滑な活動のために特別な能力が求められる。私は、満州軍におけるこの重要な部署の状態に満足せず、この分野で卓越した能力を発揮したある参謀将校の派遣を要請したが、全く不十分な理由で拒否された。そして又、総参謀部は、満州戦域からの戦闘詳報に意を用いることなく、地名や連隊名のような資料を公表し、敵側に連隊所在地を容易に判定させた」

これらのことから、ロシア陸軍総参謀部は、日露開戦前における情報収集を、あるいは開戦初期の秘密保全を軽視していたということができる。

皇帝ニコライ二世は日露開戦に際し、「日本人は猿である。そんなものは一撃のもとに退治しうる」[9]という妄想を抱き、開戦直後の公文書にも「彼等日本の猿共が」[10]という言葉がしばしば、用いられていた。このことは、日本軍に対する適切な情報収集が行われていなかったことを示している。

クロパトキン将軍は日本戦勝の最大の原因として、次の言葉を書き留めている。(11)

「我々は日本軍の装備、特に精神力を甘く見下し、日本軍との戦闘に対する態度が余りにも真剣ではなかった」

(1) General Kuropatkin, *Zapiski Generala Kuropatkina o Russko-Yaponskoj Vojne* (Berlin, 1909), p.199.
(2) I.V.Derevyanko, *Tainy Russko-Yaponskoj Vojny:Russkaya Razvedka i kontrrazvedka v Vojne 1904-1905* (Moskva, 1993), p.153.
(3) *Ibid.*, p.148.
(4) *Ibid.*, p.154.
(5) General Kuropatkin, op. cit., p.201.
(6) Derevyanko, *op.cit.*, p.154.
(7) *Ibid.*
(8) General Kuropatkin, *op.cit.*, p.277.
(9) 大竹博吉『ウイッテ伯回想記・日露戦争と露西亜革命（上）』（原書房、一九七二年）三六四頁。
(10) 同右、三五七頁。
(11) General Kuropatkin, *op.cit.*, p.188.

二　対日情報見積り

ウイッテ伯は、回想記の中で「ロシア国民が日本との戦争について、いかに楽観していたかは、次の一例を見ても明

らかである[1]」と、述べている。

「一九〇四（明治三七）年一月二七日に宣戦の詔勅が発せられた時、バンノフスキー前陸軍大臣とクロパトキン現陸相が会見して、この戦争の成行きについて協議した。その際、クロパトキンは、日露両国の兵力比率について、日本兵一人半に対してロシア兵一人を配するのを適当とした。ところが、バンノフスキーは、日本兵二人に対してロシア兵一人を充当すれば十分だとして互いに論争したそうである。これが、軍事情勢に最も精通しているべき筈の新旧陸軍大臣の意見であった」

このように、ロシア陸軍首脳部は日露両軍の相対戦闘力を、極めて楽観的に見積っていた。すなわち、日本軍の半分の兵力で、日本軍粉砕の可能性が認識されていた訳である。皇帝以下、要路の高官ほとんどが鎧袖一触、日本への勝利を確信していたのである[2]。

ロシア陸軍総参謀部は開戦前、「日本陸軍の戦術および戦争準備」と題する小冊子を作成し、参考資料として各大隊へ配付していたようである[3]。この小冊子は一九〇四（明治三七）年一〇月の沙河戦闘後、ロシア軍捕獲文書の中から発見され、日本軍によってロシア語から日本語へ、日本語から英語に翻訳された。その後、英国陸軍観戦武官が[4]一九〇五（明治三八）年二月、従軍報告として本国へ送付したものである。それによれば、ロシア総参謀部は日本陸軍の特徴を、次のようにみていた。

(一) 下士官および兵

日本軍兵士は背が低く、肉体的な発達状況も不十分であるが、健康そうな体格をしている。その行動はやや緩慢であるが、理解は早く、器用である。日本軍兵士の主な資質は陽気、器用、忍耐、非利己的である。日本軍兵士は重装備でなければ、長距離行軍が可能である。この単純さは、日本国内の生活様式に負っている。一九〇〇（明治三三）年の北清事変以来、日本軍の重装備長距離行軍は、兵士に多大の疲労を与えることが日本の文書で指摘されている。日本人は生まれつき軍人種族で、兵士の生活に容易に慣れ、軍規に素早く適応する。下士官・兵は陸軍内規の細部を順守している。

(二)　歩兵

日本陸軍の戦闘訓練は、一八八〇年代のドイツ方式をモデルにしており、それに一部修正を加えている。歩兵は中隊および大隊の双方とも、機動・移動に巧妙で、その行軍能力には驚くべきものがある。下士官は独自に兵を指導し、中隊長は部隊運用を熟知しているが、射撃能力はその他の点よりも劣っている。

(三)　騎兵

騎兵の馬は極めて貧弱、弱小かつ訓練が不十分で、軍用に適していない。各騎兵は騎兵服装で乗馬し、一般的にそのくらはバランスがよくない。騎兵は四本の手綱を使用し、馬の速力は遅く、速足は無理である。従って、行軍も無理である。これらの欠点から見る所、日本軍には良好な騎兵教官が不在で、騎兵は馬の訓練に慣れていない。これらの欠陥は一部、日本の自然環境に基づくものであり、広い平原が少なく、騎兵を育成する機会に乏しいことによる。騎兵の装備は統一性を欠き、非科学的である。

(四)　砲兵

砲兵の器材、馬、装備は若干良好であるが、砲兵の馬も小さく、訓練も不十分である。重砲を牽引した砲兵の行軍は極めて遅い。砲手は機動において巧妙で、その動作は沈着冷静であるが、砲兵の訓練度、規律はかなり歩兵よりも劣っ

ている。射撃の正確度は、ロシア軍砲手とほぼ互角である。

以上のように、ロシア陸軍当局は、地上戦闘における日本陸軍の基幹三兵科の特質について、低い評価を下しており、二等国の陸軍力を想定していたのである。[5] これらの内容は、駐日ロシア陸軍武官からの報告に基づいて作成されたものと考えられる。

クロパトキン満州軍司令官の回想録によれば、開戦前におけるロシア陸軍総参謀部の対日情報見積りは、次の通りであった。[6]

「我々が入手した日本陸軍の兵力、組織および訓練状況に関する最新情報は、駐日陸軍武官バンノフスキー参謀大佐の報告に基づいている。一九〇三（明治三六）年に訪日したアダバシ参謀大佐が総参謀部ジリンスキー少将に提出した[7]日本陸軍の予備兵力に関する情報は極めて重要であった。しかし、その情報は、バンノフスキー大佐の武官報告と全く異なる内容であったため、ジリンスキー少将が無視した。数ヵ月後、駐日海軍武官ルーシン海軍中佐も又、日本陸軍の予備兵力に関する同様な情報を、海軍総参謀部へ報告している。海軍総参謀部はその情報要約を、サハロフ総参謀長へ報告した。あとになって、その情報資料の正確度が明らかになっている。この時も又、サハロフおよびジリンスキー両将軍は海軍の情報要約を握りつぶした。従って、一九〇三（明治三六）年および一九〇四（明治三七）年の日本軍に関する情報要約書の中には、予備軍について一字も記載されていなかったのである。日本陸軍の予備大兵力に関する認識が余りにも欠如していた。その結果、駐日陸軍武官の報告に基づく総参謀部の見積りによれば、日本陸軍の予備軍を含む常備軍および野戦軍の総兵力数は、四〇万余りに過ぎなかった」

クロパトキン将軍はさらに続けて、次のように述べている。[8]

「日本陸軍における予備軍の編成は、我々の見積りに入っていなかった。一九〇三（明治三六）年一一月の時点で、旅順において日本軍と衝突する場合、極東軍戦略展開計画の中で見積られていた日本軍兵力は、次の通りであった。即ち、日本軍が開戦当初、野戦軍の編成完結までに野戦行動に派遣し得る兵力は現有一三コ野戦師団中、一〇コ師団のみである。一二〇コ歩兵大隊、四六コ騎兵中隊、一〇コ工兵大隊、一コ攻城大隊から成る総兵力一二万五〇〇〇名が、日本陸軍に対する兵力見積りであった。

この見積りは一九〇三（明治三六）年、駐日陸軍武官サモイロフ参謀中佐からの報告に基づくものである。私が訪日[9]した際、サモイロフ中佐の報告によれば、日本軍の我々に対する戦力は一三コ師団中の一〇コ師団のみで、予備軍については無関心であった。又、総参謀長が一九〇四（明治三七）年一月三〇日、私に提出した総参謀部の作戦計画案に『入手した情報によれば、日本陸軍は一三コ野戦師団のうち、一一コ師団を戦線に投入し、残余の二コ師団を日本に残置させる』と記載され、この計画案でも予備軍については一切、触れられていなかったのである」

因に、日本陸軍野戦部隊の総数は一五六コ歩兵大隊、五四コ騎兵中隊、一〇六コ砲兵中隊（一六三六門）、三八コ工兵中隊、一コ鉄道大隊であり、歩兵大隊数でロシア陸軍全体に対しては約九％に過ぎなかったが、開戦当初、極東に展開していたロシア陸軍野戦軍に対しては約二倍強であった。[10]それに対し、ロシア陸軍総参謀部は日本軍の戦闘力を、1/3以下に見積っていた。[11]それが、じ後の各戦闘に与えた影響は言うに及ばない。

クロパトキン将軍は対日情報見積り、特に日本陸軍の潜在予備戦力に関するロシア総参謀部の過小評価を指摘し、[12]日

本軍の調査を命ぜられた駐日陸軍武官団の怠慢を指弾[13]しているが、それらはすべて、ロシア陸軍の最高責任者（陸相）としての自らの統御不足を問われるものに他ならない。「我々は情報不足にも拘らず、常に優越感と軽蔑の目で日本軍に対処した[14]」と、クロパトキン自身が述懐しているように、ヨーロッパにおける白人大国ロシアの対日感には、夜郎自大的な自惚れのみが横溢していたのは確かである。「ロシア軍司令部は敵情に関する最新かつ正確な情報もなく、目隠しされてリンクにあがるボクサーのようであった。不十分な情報活動が、この戦争におけるロシア敗北の根本原因の一つであった[15]」と、本章においてしばしば引用したジェレビャンコ自身が情報活動の不足を、ロシア敗因の一つとして結論づけている。

クロパトキン満州軍司令官は、開戦初期の一九〇五（明治三八）年三月一八日および四月三〇日付けの上奏書の中で、「日本軍が我が軍の配置状況を知悉し、それらの情報を行動計画に活用していたのに反し、我が軍は決心さえも手探り状態であった[16]」と報告して、暗に開戦前における情報戦争の敗北を認めている。

ロシア陸軍総参謀部の情報活動に対して、日本参謀本部は、日露決戦を予期して最大限の努力を集中展開させた。その中で、日英軍事協商の日本陸軍代表福島安正少将が「イギリスから提供された対露情報は日本が受けた利益の最大のものであった[17]」と、後に述べているように、最も権威ある英陸軍諜報局との太い情報ルートと信頼関係が日本参謀本部の情報活動を、より推進させたものと言える。その結果、日本参謀本部は、日露開戦前の情報戦争において極めて優位に立つことが出来た。即ち、それは、日本陸軍が情報戦争としての日露戦争において勝利したことにほかならない。

(1) 大竹博吉『ウイッテ伯回想記・日露戦争と露西亜革命（上）』（原書房、一九七二年）三六五頁。
(2) 同右、三五六頁。
(3) Great Britain. War Office, *The Russo-Japanese War: Report from British Officers Attached to the Japanese and Russian Forces in the Field* (London, 1908), Vol.II, p.493.
(4) J.B.Jardine 大尉、第一軍（黒木大将）従軍（梅渓昇編『明治期外国人叙勲史料集成・第四巻』（思文閣、一九九一年）二一八頁）。
(5) General Kuropatkin, *Zapiski Generala Kuropatkina o Russko-Yaponskoj Vojne* (Berlin 1909), p.188.
(6) *Ibid.*, p.194.
(7) 総参謀部第二参謀次長局長と思われる。
(8) General Kuropatkin, *op.cit.*, p.195.
(9) 一九〇三（明治三六）年六月一二日から約二週間、日本に滞在。
(10) 桑田悦編『近代日本戦争史・第一編』（紀伊国屋書店、一九九五年）四六四頁。
(11) General Kuropatkin, *op.cit.*, p.195
(12) *Ibid.*
(13) *Ibid.*, p.198.
(14) *Ibid.*, p.292.
(15) I.V.Derevyanko, *Tajny Russko-Yaponskoj Vojny:Russkaya Razvedka i kontrrazvedka v Vojne 1904-1905* (Moskza, 1993), p154.
(16) "Posle Voiny", *Voenno-Obshchestvennyi Sbornik*, II (S.Peterbyrg, 1907), 7.
(17) 島貫重節『戦略・日露戦争　上』（原書房、一九八〇年）一四八頁。

〔参考〕

Ⅰ　史料

一「日英連合軍大作戦方針」（一―二）
二「竜動會議始末報告」（一―三）
三「日英軍事協商に関する参謀総長意見書」（一―三）
四「応聘将校下士心得」（二―二）
五「海外派遣者報告規定」（二―二）
六「将校下士ニシテ外国ニ招聘セラルル者ノ手続」（二―二）
七「別表　八　露国戦時兵力概見表」（三―一）
八「別表　九　黒龍軍管及関東州配兵表」（三―一）
九「別表　十　黒龍江軍管及関東州各地方戦時兵力概見表」（三―一）
十「別表十一　西伯利軍管区配兵表及戦時兵力概見表」（三―一）
十一「別表十二　黒龍軍管区・関東州配兵表」（三―一）
十二「別表十三　絶東派遣豫定露軍一覧表」（三―一）
十三「別表十四　極東露国重要職員姓名一覧表」（三―一）

Ⅱ　資料

一　英国陸軍諜報局関係資料（一―三）
二　満州・朝鮮各全図（二―三）

注　各史（資）料の末尾括弧内の数字は、使用した（章―節）を示す。

〔参考〕

I　史料

史料　一　日英連合軍大作戦方針

東亜ノ平和ヲ維持スル為メ日英ノ同盟ハ成立セリ東亜ノ平和トハ首トシ清韓両国ヲ保全スル目的ナリ此同盟ニ頼リ永ク其目的ヲ達シ得レバ無上ノ幸福ナリト雖モ事変ハ毎ニ意想ノ外ニ生ス若シ意外ノ事変ノ為メ平和ヲ破綻セントスル者有ランカ直チ二百方之レカ保全ニ勉メサル可ラス若シ保全ノ手段盡キタルノ日ハ之ヲ破壊セントスル国ニ対シ遂ニ干戈ニ訴ヘサル可サラル場合ノ来ラサルヲ保シ難シ因テ軍事ノ局ニ当ル者ハ常ニ此場合ニ対スル計画ヲ予定シ在ルヲ要ス

夫レ作戦ヲ計画スルニハ先ツ敵手タルヘキ邦国ヲ案定セサル可ラス惟フニ今日ニ於テ清韓両国ノ保全ヲ妨ケントスル者即チ日英同盟ノ目的ヲ攪乱セントスル者ハ何レノ邦国ナルヘキカ其欧米両州中ニ在ルヘキハ誰モ異議ナキ所ナルヘシ両州中ノ邦国ニシテ猿臂ヲ東亜ニ延ハサント欲スルハ露独仏墺伊米ノ六国ニ外ナラス此等ノ国ハ自国ノ利益ヨリ打算シテ或ハ単独ニ事ヲ起ス事有ルヘキ或ハ数国連合シテ日英同盟ノ主旨ヲ破壊セントスル者アランモ亦測リ難シ然レドモ尚ホ仔細ニ査察スレハ此六国ノ数ハ更に縮メテ一二ト為スヲ得ヘシ何トナレハ墺伊二国ノ如キハ殆ント攪乱ヲ首唱スル事無シト断定シ得ヘク剰他ノ四国ニ於テモ亦其希望ニ厚薄アルヘシ試ニ輿地図ヲ展ヘテ之ヲ観ルニ清韓両国ニ壤地ヲ近接シ在ルモノハ露国ニシテ之ニ亜クハ安南ニ於テ清国ト接壤スル仏国ナリ其他独逸ノ如キハ少数ノ兵膠州湾ニ駐屯シ在リト雖モ更ニ本国ヨリ多数ノ兵ヲ派遣スルニ非サレハ大ニ作戦スルコト能ハサルヘシ米国ハ比律賓島即チ清国ノ対岸ニ兵ヲ駐屯シ在リト雖モ是レ亦多大ノ数ニ非ス故ニ六箇ノ邦国中、清ニ関係ヲ有スルハ四箇国ニシテ四箇国中関係ノ最モ深キヲ露国トシ之ニ次クヲ仏国トス現今世界ノ情勢上日英両国ノ反対ニ立チ東亜ノ平和ヲ攪乱スルコト有ルヘキ顧慮ノ多キハ此露仏両国ノ一カ或ハ其同盟ニ在リト予想シ得ヘシ而シテ他ノ四国中ノ一二ノ此両国ニ加盟スルコト有ランニハ其加ハルノ数ニ応シテ随ツテ危険ノ度ヲ増サン乃チ最大ノ危険ハ欧米両州六国ノ協同ナリト仮定シ得ヘシ是ヲ以テ日英両国ハ此想定ヲ標準トシテ予メ之ニ当ルノ計画ヲ立テ以テ万一ノ変ニ応シ違算ナキヲ期セサル可ラス而シテ其計画ノ基準ハ上述ノ六国ノ此希望ノ為使用シ得ヘキ兵力ニ在リ乃チ之ヲ調査スルニ左ノ如シ

第1表

列国海軍力比較表		
国名＼区分	全海軍力	在東洋海軍力
日本	24万頓	21万頓
英国	152万頓	15万頓
露国	39万頓	11万頓
仏国	60万頓	6万頓
独国	36万頓	4万頓
伊国	28万頓	1万頓
米国	30万頓	5万頓
備考	1　頓数万位以下ハ四捨五入ヲ為シタルモノナリ 2　外国全海軍力ハ明治34年10月ノ調査ニ依リ同在東洋海軍力ハ明治35年5月1日ノ調査ニ依ル	

第2表

二国以上連合海軍力比較表		
連合国名＼区分	全海軍力	在東洋海軍力
日英	176万頓	36万頓
露仏	99万頓	17万頓
露仏独	135万頓	21万頓
露仏独伊	163万頓	22万頓
露仏独伊米	193万頓	27万頓
備考	本表ハ別紙列国海軍力比較表ニ依リテ調整シタルモノナリ	

第3表

絶東駐屯露軍戦時兵力一覧表　明治35年5月調査						
区分		地名	満　　州	黒龍軍管	西伯利軍管	総　　計
野戦兵	歩兵	大隊	38(　4)	26(　12)	41(　40)	105(　56)
		人員	39,783(3,976)	26,640(11,928)	40,245(39,240)	106,668(55,144)
	騎兵	中隊	33(　1)	57(　19)	42(　14)	132(　34)
		人員	5,633(　162)	9,236(3,078)	7,945(2,366)	22,814(5,606)
	砲兵	中隊	19	5	8	32
		人員	5,799	1,484	1,968	9,251
	工兵	中隊	4	4		8
		人員	1,130	825		1,955
	輜重	輸送		輸5　縦7½		輸5　縦7½
		縦列		(1,193)(1,832)		(3,025)
	人員計		52,345(4,138)	41,210(18,031)	50,158(41,606)	143,713(63,775)
要塞兵	歩兵	大隊	2	7		9
		人員	2,030	7,125		9,155
	砲兵	中隊	8	8ト　1部隊		16ト　1部隊
		人員	2,806	3,360		6,166
	工兵	中隊	1	1　水雷　3		2　水雷　3
		人員	135	708		843
	人員計		4,971	11,193		16,164
鉄道隊		中隊		6		6
		人員		1,674		1,674
人員合計			57,316(4,138)	54,077(18,031)	50,158(42,225)	161,551(63,775)

備考

1．(　)内ノ数字ハ(　)外ノ数字中ニ含有スルモノニシテ我後備隊ニ等シキ部隊トス即チ歩兵ニ在テハ予備兵、騎兵ニ在テハ哥薩克第3次兵ヲ示ス砲兵ニハ戦時特設スル部隊アルモ悉ク我野戦隊ト同等ノ戦闘力ヲ有スルモノト見做シ本表ニハ其細部ヲ掲ゲズ

2．輜重兵ニハ平時ヨリ常設、幹部隊アルモ其兵力微弱ニシテ大部ハ戦時拡大スルヲ以テ悉ク我後備兵ニ等シキモ見做ス而シテ表中ノ（輸送隊）ハ糧食縦列ヲ示シ（縦列）ハ弾薬縦列ヲ示ス

3．満州ノ区画内ニ在ルモノハ目下満州ニ現在スル兵力ニシテ関東州駐屯隊ヲ含有ス而シテ黒龍軍管ノ区画内ニ在ルモノハ目下満州ニ駐屯セル兵力ヲ除キタル数即チ目下黒龍軍管ニ現存スル数ヲ示ス

4．満州駐屯隊ニハ目下多数ノ減員アルモノノ如クナルモ精確ナル数ヲ得ザルヲ以テ本表ニハ編制表ノ人員ヲ示ス

5．黒龍軍管ニハ新設ノ予備歩兵2大隊西伯利軍管ニハ同ジク1大隊アルモ本表ニハ其編成完備セルモノトシテ示セリ

第4表

東洋ニ於ケル仏国陸軍力						
兵種＼所在地	北清	上海	広州湾	東京	交趾支那	安南
歩兵	2,000	700	400	18,370	1,943	2,938
砲兵	240			1,280		960
騎兵	60			150		
工兵	100			520		
小計	2,400人 野山 砲12門	700人 山砲 6門	400	20,320 山砲 野砲 48門 徒歩砲	5,841 山砲、野砲、徒歩砲 36門	
総計	3,500人 砲…18門			26,161人 砲…84門		
備考	1　前表ノ外、東京、交趾支那及ビ安南ニハ規軍約2万3千人アリ					

第5表

露軍ノ満州及烏蘇里に集中スルニ要スル日数概見表（明治35年5月）							
集中地	軍管区 名	軍管区 所在地	兵力 隊数	兵力 兵数	集中地到着日数 全輸送	集中地到着日数 西伯利・後貝加爾ノミ	輸送法の摘要
満州	黒龍	満州	歩 40Bn 騎 27Co 砲 26Co	54,666			
		後貝	騎 48Co	7,920			
		合計		62,586	35～42日	35～42日	チタ～ハルビン
烏蘇里		烏蘇里	歩 21Bn 騎 9Co 砲 11Co	27,553			
		満州	騎 6Co 砲 1Co	1,385	13日	13日	ニングタ～ニコリスク行軍
		後貝加爾	歩 4Co	3,920	18～23日	18～23日	ストレテンスク発
			歩 8Co 砲 2Co	8,441	9～36日	9～36日	東清鉄道
	西伯利		歩 12Bn 騎 24Co 砲 4Co	16,962	24～52日	24～52日	後貝加爾鉄道
			歩 26Co	19,600	40～89日	40～89日	東清鉄道
	莫斬科		歩 1D 砲 6Co	25,800	45～71日	94～113日	東清鉄道 一部行軍
			同上	25,800	65～91日	114～133日	同上
	合計			129,461			
備考	本表ハ後貝加爾鉄道ハ15両編成列車毎日4回、東清鉄道ハ1回、黒龍江ハストレテンスク及ポクロフカヨリ後貝加爾鉄道ノ2列車分トシテ計算セリ						

「右第二表ニ示ス如ク東洋ニ在ル海軍力ヲ比較スルニ露仏二国連合ハ日英両国ノ半数ニ足ラス独ヲ加ルモ尚ホ三分ノ二ニ上ラス伊ヲ加ヘ米ヲ合セテモ未タ日英ノ数ニ匹敵スル能ハサルナリ」

五月二二日、山本海相の意見により、付表のうち第一表および第二表が削除され、上記の表現が、次のように修正されている。

「東洋ニ在ル海軍力ヲ比較スルニ日英連合海軍ノ勢力ハ露国海軍ハ勿論露仏連合海軍ノ勢力ヨリモ遥カニ優レリ」

又其陸兵ハ第三表露兵ノ黒龍軍管区即チ南烏蘇利及満州遼東ニ在ルモノ約十万第四表仏兵ノ北清上海広州湾東京安南及交趾支那ニ在ルモノ約三万即チ露仏二国ノ陸兵ノ東亜ニ在ルモノ合計一三万ナリ然レドモ若シ黄海勃海日本海等ノ制海権ヲ失フタル彼レ二国ハ陸兵ノ力ヲ以テ直接協同作戦スル能ハサルヘシ故ニ我作戦計画ハ縦ヒ露仏二国ノ同盟連合軍ニ対スルモ敵ノ陸兵ハ唯露国ノ東亜ニ集中シ得ン兵力ヲ打算スルノミニテ足レリ

是ニ於テ露仏二国ノ我ニ対シ和親ヲ破ルニ際シ彼ノ採ラントスル作戦計画案ヲ攻究スルニ彼直チニ攻勢ヲ取リ来ルヘキヤ否ヤ惟フニ其海軍力第二表ニ示ス如ク大ニ我両国ト懸隔セルカ故ニ必ス彼ヨリ来リテ海戦ヲ挑ムコトヲ為ササルヘシ蓋シ二国ノ艦隊ハ洋海上ノ交戦ヲ避ケ露国ノ海軍根拠地浦汐斯徳及旅順ニ入リ陸兵ノ援助ヲ借リテ港湾内ニ於テ拒戦シ速ニ多数ノ露国陸兵ヲ極東ニ集中シ之ヲ以テ其目的ヲ達成センコトヲ図ルヘシ

其極東ニ集中シ得ル第一ノ兵即チ東亜駐屯ノモノハ第三表ノ如ク約一〇万トス而シテ此兵ノ配置ヲ予想スルニ一部ハ南烏蘇利ニ一部ハ南遼東ニ其大部ハ烏遼両方面ニ赴援スルニ便ナル哈尔賓地方ニ集中スルナルヘシ

是ニ於テ我両国ハ此仮定ヲ標準トシテ作戦スルニ彼我兵力ノ関係上必ス攻勢ヲ取ラサル可カラ而シテ其攻勢ヲ取ルニ甲乙ノ二策アリ甲ハ両国ノ艦隊ノミヲ以テ彼ノ根拠地ニ向ヒ其陸海軍ヲ攻撃スルコト乙ハ我陸海軍ノ力ヲ合セテ彼ノ陸海軍ヲ攻撃スルコト是ナリ

此甲乙策ハ和漢ノ兵法ニ所謂ル奇正ニシテ甲ハ奇ナリ乙ハ正ナリ夫レ敵ノ海軍根拠地ハ旅順浦塩並ニ堅固ナル防御ヲ湾口ニ有ス之ニ向ヒ艦隊ノミヲ以テ攻撃セントスル第一策ハ危険ヲ冒ス作戦ニシテ奇捷ヲ僥倖スルモノナルカ故ニ或ハ為メニ時日ヲ徒費シ敵ノ術中ニ陥リ遂ニ大ナル不利ヲ招クニ至ラン因テ此ノ如キ術策ハ唯々臨機ノ用ニ供フルニ止メ正則ナル第二策ヲ取ルヲ可トス

即チ我両国ノ陸海軍戦力ニテ敵軍ヲ圧迫シ以テ目的ヲ達センコト実ニ万全ノ策トナリトス

第五表ニ示セシ如ク露国ノ四十四日以内ニ極東ニ集中シ得ル兵力ハ約十万ナリ然レドモ露ハ大国ニシテ多大ノ兵力ヲ有スルカ故ニ此四十四日以上ヲ経過スレハ日子ヲ略スルニ随テ集中シ得ル兵数ハ増スヘシ此ノ如キニ至ルトキハ其極東ニ集中スル兵力ハ我両国ノ兵力ヨリ優勢ナルモトト為ルヘシ唯々其之ヲ自由ニ集中シ得サルハ運輸力ノ不便ナル是ナリ故ニ我作戦ハ彼ノ不便トスル所ニ乗シ勉メテ短少ノ日子ヲ以テ我陸兵ヲ運送シ優勢ナル兵力ヲ以テ速ニ彼ヲ攻撃スルニ在リ

夫レ僅少ノ日子ヲ以テ優勢ノ陸兵ヲ輸送セサル可ラサルコト此ノ如シ乃チ帝国ハ常ニ之カ準備ニ勉メサル可ラス凡ソ迅速ニ出兵スルニ必要ナルモノハ動員及鉄道船舶ノ輸送ナリ我陸軍ノ動員計画及鉄道ノ輸送方法ハ共ニ大ニ整頓シ在リ独リ尚ホ補足ヲ要スルハ船舶ナリ現下帝国ノ軍事輸送ニ供シ得ル船舶ハ五十万頓アリ而シテ此内拾五万頓ハ我艦隊ニ付属シ他ノ三拾五万頓ノ船モ常ニ各所ニ散在スルカ故ニ之ヲ集ムルニハ大ニ日子ヲ要ス動員後二十日間ニ集メ得ルモノハ僅カニ二十万頓余アルノミ凡ソ一師団ノ兵ヲ輸送スルニハ十二万頓ノ船ヲ要ス今船舶僅ニ二十万頓余ナルトキハ縦ヒ二十日ヲ費スモ尚ホ二個師団ヲ同時ニ輸送スル能ハス即チ四十四日以内ニ於テ敵ニ優サル兵力ヲ戦地ニ具備センコトハ不可能ノコトニ属シ大ニ不便ヲ感スル所タリ故ニ適当ノ方法ヲ以テ船舶ノ不足ヲ補充スルコトヲ図ラサル可ラス

以上作戦ノ方針ヲ約言スレハ左ノ如シ

○日英両国ハ速ニ艦隊ヲ集中シテ敵艦ヲ撃砕スヘシ

○若シ敵、海戦ヲ避ケ港湾内ニ潜マハ輙チ之ヲ封鎖シテ海上ヲ制シ速ニ優勢ナル陸軍ヲ輸送シ陸海軍両軍協力シテ敵ノ陸兵ノミ未タ大ニ集ラサルニ迨ヒ其海軍根拠地ヲ攻撃シ以テ勝ヲ制スルノ地歩ヲ占ムヘシ

付　記

清韓両国ノ事ハ本論中ニ論及セサリシカ是ハ其時ニ臨ミ左ノ方法ヲ採ラントス

韓国ニハ速ニ若干ノ兵ヲ京城ニ派遣シ威力ヲ以テ其向背ヲ決セシムヘシ

清国ハ目下ノ情況ヨリ推測スレハ之ヲ誘導シテ我作戦ヲ妨害セサシムルコト決シテ難事ニ非ス少クモ厳正中立ヲ守ラシムルヲ得ヘク或ハ我カ為メニ利用シテ敵ニ妨害ヲ加ヘシムルコトヲ得ン

史料　二　竜動會議始末報告

明治卅五年五月十四日横須賀會議アリ
同十七日彰仁親王殿下ノ随行ヲ命セラレ急ニ英国皇帝並ニ皇后両陛下ノ戴冠式ニ赴ク事トナリ更ニ陸軍大臣ヨリ左ノ訓令ヲ受ク
訓令
貴官ハ英国陸軍当局者ト會見ノ際左ノ主旨ニ従ヒ商議スベシ
一　商議スベキ作戦方針ハ別紙ニ據ルベシ（別紙ハ参謀本部ヨリ下附ス）
二　作戦地域ノ範囲ハ本協商ニ基キ極東ニ局限スベシ
三　英国ヨリ出兵ニ際シ援助シ得ベキ船舶ノ噸数及該船舶ノ下ノ関ニ集中シ得ベキ時日ノ件
四　英国ヨリ極東ニ出兵シ得ル陸兵数及其発送時日ノ件
五　海軍ノ事ニ関シテハ伊集院海軍少将ト協議スベシ
明治卅五年五月廿二日

陸軍大臣　寺内正毅

陸軍少将　福島安正　殿

英国海軍当事者ト商議スルニ方リ帝国海軍ノ事ニ関シテハ伊集院海軍少将ヲシテ其任ニ当ラシメ貴官ハ同少将ト和衷協同シ其作戦ニ陸海軍ノ別アリト雖モ帝国カ外ニ向テ達セントスル宏遠ノ目的ニ至テハ彼此一貫相異ナルコトナキヲ思ヒ公明自ラ持シ以テ能ク其重任ヲ尽サンコトヲ勉ムベシ
右特ニ訓示ス
明治卅五年五月二十三日

陸軍大臣　寺内正毅

陸軍少将　福島安正　殿

五月廿三日加拿他汽船會社ノエムブレッス、ヲフ、ジャッパン號ニ搭シテ横浜ヲ解纜シ六月三日バアンクーバルニ上陸シ四日汽車ニ乗シテ東ヲ指シ格機山ノ東方強雨ノ為メ線路ニ故障ヲ生シテ前日ノ列車轉覆セシ等ノ事アリシ故豫定ヨリモ大ヒニ時間ヲ費ヤシタリシガ幸ヒニシテ同十日夜新約克ニ達シ十一日午前十時英国ニ向テ解纜ノ汽船セントルイ號ニ搭乗スルヲ得タリ而シテ大西洋ヲ航スル事七昼夜ニシテ豫定ノ通リ十九日竜動ニ到着セリ

此時竜動ハ戴冠式ノ準備ニ雑踏ヲ極メ数十万人ノ内外国人ハ街巷ニ充塞シ官民只タ此事ニ忙殺セラルル有様ナルヲ以テ当局者ニ普通ノ訪問ヲ為セシノミニテ未タ商議ノ端緒ニ就カス所謂戴冠週ノ経過スルヲ待タントセリ

是ヨリ先キ宇都宮少佐カ諜報局作戦部長ヲルタム中佐ト會合シ満州ニ對スル作戦上ノ研究ヲ為セシハ仮令個人間ノ研究ニ過サル考ヲ以テ為シタルニモセヨ注意スヘキ事項多カルベキヲ思ヒ詳細宇佐宮少佐ニ尋問セシニヲルタム中佐ニ話セシ要領左ノ如シ

一　日本ハ短時日ニ精兵三拾萬ヲ動員スルヲ得ベシ

二　作戦目標ハ哈尓賓タルベシ

三　日本ハ英国陸軍ノ来援ヲ求メザルベシ

四　日本ノ求ムル所ハ運送船並ニ軍資金ナルベシ

ヲルタム中佐ハ宇佐宮少佐ニ英国ハ安南並ニ東京地方ニ作戦スルノ希望ヲ有スルヲ以テ此際日本陸軍ノ来援ヲ熱望セリト又連合陸海軍ノ指揮権ニ関シ中佐ハ陸軍ノ指揮ヲ日本ニ譲リ海軍ノ指揮ヲ英国ニ得ン事ノ意思ヲ陳タリト

同廿日安正ヲルタム中佐ト倶楽部ニ會食セシ際中佐曰ク貴官ハ諜報局長ニコルソン中将ニ面會シ商議スルノ希望ヲ有セラルルカ中将ハ頻リニ貴官ノ到着ヲ待チ日英ノ連合作戦ニ関スル要務ヲ協議スルヲ希望シ居レリト安正曰ク本官モ同様ノ希望ヲ有シ且ツ貴国ノ当事者ト商議スルヲ得ベキ権能ヲ有シ居レリ只タ目今ハ官民共ニ戴冠式ノ準備ニ日モ亦タ足ラザル様子ナレバ此一週ヲ経過セシ後チ緩々協議ヲ尽シタキ希望ナリ又貴官モ知ラルル通リ事ハ最モ機密ヲ要スルヲ以テ商議ノ際ニ相會スル者ハ責任アル両国ノ陸海軍委員ニ限リタシ是等ノ希望ヲ豫メ貴官ヨリニコルソン中将ニ含メ置カレタシト中佐曰ク貴意ヲ領セリ英国ノ陸軍ヨリハ諜報局長ニコルソン中将委員ニ任命セラルベシ貴官ハ貴国ノ公使ヲ経テ我外務大臣ニ公文ヲ発セラルベキヤト安正曰ク否ナ第一回會議ハ既ニ我横須賀ニ於テセリ而シテ竜動ニ於テ開カルベキ第二回ノ會議ニ付イテ東京駐紮ノ貴国公使ヨリ貴国ノ外務大臣ヘ報告アリシ筈ナルヲ以テ本官ハ別ニ公文ノ交換ヲ為ササル考ナリ且ツ陸海両軍連合作戦ノ要領ハ我横須賀ニ於テ其議ヲ尽シタルヲ以テ此ニ開カルベキ會議ハ陸海各別ニ商議スル方、便利ナラント思考ス云々ト此末項ハ大ヒニ顧慮スル所アリテ特ニ話シ

置タリ

同廿三日オルタム中佐ハ書翰ヲ送リ去ル火曜日（二十日）倶楽部ニ於テ安正ノ意見ヲニコルソン中将ニ陳ヘタルニ中将ハ海軍省ト協議シ戴冠式ノ終リタル後チ會議ノ時日ヲ決定シテ安正ノ同意ヲ求メントスル旨ヲ申越タリ

同廿四日英国皇帝陛下病ヒ篤ク竟ニ施術セラレ聖壽危シトノ事ニテ此夜公然戴冠式延引ノ旨ヲ発表セラレタリ

戴冠式中止セラレタルヲ以テ最早来週ヲ待ツヲ要セス故ニ書ヲ送テオルタム中佐ノ書翰ニ答ヘ且ツ會議ノ前豫メ一二ノ相談シ置タキ事アル趣ヲ申シ通セリ

同廿五日オルタム中佐又書翰ヲ以テ戴冠式延期ノ不幸ニ関セス英国政府ハ安正ト商議ヲ開クノ希望ヲ有スル旨ヲ告ケ且ツ其時日ヲ決定スルノ前ニ於テニコルソン中将ハ詳細ニ関シ政府ノ決定ヲ待チツツアル趣ヲ申来レリ

同廿六日電信ヲ以テ伊集院海軍少将ノ在否ヲ確カメタル後チ汽車ニテポーツマウスノ錨地ニ赴キ少将ニ面會シテ近日以来ノ経過ヲ陳ヘ且ツ来週ハ會議ノ運ヒニ至ルベキヲ以テ左ノ件々ヲ協議セリ

一　陸海軍指揮権問題ノ出タル時ハ之ニ應セス他日ノ為メニ餘地ヲ存シ置ク事

二　陸海軍各別ニ會議ヲ開クノ方針ヲ取ル事

三　責任者ノ外會議ニ列セシメザル事

是等ノ事ニ関シテハ竟動ニ於テ安正彼ノ責任者ト豫メ手続ヲ定ムルヲ約シ同日竟動ニ帰着セリ

同三十日オルタム中佐ハニコルソン中将ノ命ヲ受ケ書ヲ送テ曰クニコルソン中将並ガスタンス海軍少将ハ商議ノ準備既ニ整ヒ貴官並ニ貴官ノ同僚タル海軍少将来ル火曜日即チ七月四日午前十一時ウインチェスター館（陸軍省ノ附属官舎ニシテ諜報局ヲ置ク所）ニ於テ會議ヲ開キタシト貴官ノ便否如何ト又ニコルソン中将ハ書記官トシテオルタム中佐ヲ會議ニ列セシメ度ガスタンス少将モ亦タ同一ノ注意ヲ以テ其幕僚タル一海軍将校ヲ参列セシメ度由ヲ附記シテ同意ヲ求メ来レリ

且ツ陸海軍各別ノ會議ヲ希望シタルモ先方ニ於テハ第一會即チ陸海軍ノ連合作戦ニ関スル問題ヲ討議スル時ノミ連合會議ト為シ度趣モ申来リシ故同意シ置タリ

此時伊集院少将ハシャル子ス軍港ノ錨地ニアリ依テ其翌七月一日チャッタムニ赴キ少将ヲ見テ先方ヨリ會議ノ時日ヲ申シ来リタル事第一會ハ連合ノ會議ヲ希望シ来リタルニヨリ同意シ置タル事並ニ書記官トシテ英ノ各委員、一名宛ノ将校書記官ヲ参列セシメ度旨申シ来リ同意ヲ求メツツアル事等ヲ陳ヘ我方ニ於テモ同様一名宛ノ将校ヲ従ル事トシ同日是非竟動ニ来會アラン事ヲ陳

タリ然ルニ伊集院少将ハ同日軍艦ニ林公使等ヲ招待シ置タルニヨリ竜動ニ赴ク事能ハス且ツ今週ハ先約アリテ如何トモスル事能ハザル趣キナリシ故来週ハ何時ニテモ都合ノ出来得ル事ヲ約シテ竜動ニ帰リ翌二日左ノ書翰セリ

六月三十日附ノ貴翰ヲ領ス本官ハ来ル火曜日差支ナキモ同僚伊集院少将ハ此週間先約アリテ都合出来難キ趣ナレバ會議ハ来週月曜日マテ延期セラレン事ヲ希望ス貴官ガニコルソン中将ノ書記官トシテ會議ニ列セラルル事並ニガスタンス少将モ同一ノ注意ヲ以テ一将校ヲ従ヘラルル事ハ本官ノ喜フ所ナリ請フ此意ヲニコルソン中将ニ伝ヘラレヨ且ツ本官モ書記官トシテ宇佐宮少佐ヲ従ヘ度伊集院少将モ亦タ一幕僚将校ヲ従フベシ中将ノ同意ヲ請ヒ置カレン事ヲ望ム云々（オルタム中佐宛）

安正未タ英国全軍指揮官元帥ロバート伯及ヒ陸軍大臣ブロードリック氏ニ面會セザル故會議ノ前ニ於テ其紹介ヲニコルソン中将ニ依頼シ且ツ伊集院少将ハ海軍ノ方面ヨリ特ニ書翰ヲ以テ案内スルニ非レハ出席ニ不便ナル趣ナルヲ以テ宇都宮少佐ヲ諜報局ニ遣ハシオルタム中佐ニ其手続ヲ依頼セリ

同日オルタム中佐ヨリ左ノ書翰ニ接ス

本日附ノ貴翰ヲ宇都宮少佐ヨリ接手セリ直ニ之ヲニコルソン中将並ガスタンス少将ニ通知セシニ両将官共本月七日即チ来ル月曜日午後三時ウインチェスター館ニ於テ貴官等ニ會合セン事ヲ希望セリ又ニコルソン中将ハ貴官ノ書記官トシテ宇都宮少佐ヲ歓迎シ伊集院少将ヘハガスタンス少将ヨリ第一會ノ時日ヲ直報スル筈ナリ云々

同三日返書ヲ発シテ来ル七日（月曜日）午後三時ウインチェター館ノ會合ニ同意ノ趣ヲ申シ通セリ

同日午前十時四十五分彰仁親王殿下佛国巴里ニ向ケ発程セラル英国皇太子並ニコンノート公等停車場ニ来リ送ラル

同七日午前十一時三十分陸軍大臣並ニロバート元帥ニ面會ス

第一　陸海軍聯合會議

同日午後三時伊集院少将ト共ニ約ノ如クウインチェスター館ノ會議室ニ至ル少将ハ財部参謀ノ外玉利大佐ヲ同行セシヲ以テニコルソン中将ハ直ニ局員タルピーチ少佐ヲ加ヘタリ少佐ハ諜報局内日本軍事擔当ノ人ナリ

参与員皆ナ着席スルヤニコルソン中将先ツ満州ニ對スル作戦計畫書草案ナルモノヲ讀ミ始メタリ曰ク作戦目標ハ哈尔賓ニシテ浦潮斯徳ヲ去ル事大約四百哩ナリ云々ト安正遮リ問フテ曰ク此草案ナルモノハ貴局ノ規畫セラレシモノナルカト中将曰ク否ナ宇都宮少佐ヨリ承知セシヲ基準トセシモノナリ安正曰ク然ラハ此草按ハ単ニオルタム中佐ト宇都宮少佐トノ個人的研究問題ニ過キスシテ會議ノ問題ト為スニ足ラス此作戦ニ関シテハ別ニ討議ヲ尽シタシト中将ハ直ニ之ヲ撤回シテ陸海軍ノ聯合問題ニ移レリ然

ルニ議論兎角枝葉ニ渉リテ繁雑ヲ来シ進行遅々タルノ模様アルヲ以テ発言シテ先ツ海軍ニ関スル條項ヨリ一々決議シ行クノ便ナラン事ヲ陳ヘシニ皆ナ同意シテ伊集院少将ノ草按ニ就テ討議シ之ニ情報交換ノ事ヲ加ヘ且ツ安正ノ意見トシテ印度ニ我陸軍武官ヲ派遣シ一層情報交換ノ利便ヲ計ラン事ヲ陳ヘシニ抑モ此事タル我ニ利アリテ彼レニ益ナキノミナラス印度総督ノ意見ヲ問フベキ問題ニシテ中将ノ直ニ決シ難キ事項ナルヲ以テ政府ノ熟考ニ附スル事トシ大約二時間ノ會議ニ於テ結局シ陸軍ノ作戦問題ニ関シテハ両国陸軍ノ委員ノミニテ協議スル事トシ且ツ會議筆記ノ要領ハ委員ニ随列セシ書記官タリシ将校相集リテ順序ヲ定メ草案ヲ立テ委員ノ一閲ニ供シテ同意ヲ得タル後チ始メテ確定シ記名スル事ニ一致セリ

而シテ草案中修正ヲ要スル件二点アリテ意見ヲ申シ述ヘ一同ノ同意ヲ経テ確定シ記名セシモノ則チ別紙ノ如シ

記名セシ本書ハ我陸海軍ノ為メニ一通英国陸海軍ノ為メニ一通則チ二通ニ限リ最モ之ヲ機密ニ附スル事ト為セリ

英国ニ於テ此書ヲ見ル者ハ内閣総理大臣及ヒ全軍指揮官ロバート元帥ニシテ内閣ハ之ニ向テ認可ヲ与ルノ手続ナル由ナリ

英国ヨリ條約諸国ニ派駐スル公使館附武官ヲシテ我将校ト情報ノ交換ヲ為サシムベキ命令ヲ下スハ前項ノ認可ヲ経タル後ナリト安正竜動発程前ニコルソン中将ニ面會セシ時中将ハ曰ク我政府ニ於テハ全然是認スル事トナラント

記名セシ本書ハ伊集院少将ト連名ニテ我陸海軍大臣ニ宛テ報告スル豫定ナリシガ伊集院少将ハ白耳義国ニ赴キ不在ナル故書ヲ同官ニ送リ安正カ携帯シ帰ル趣キヲ通シ置タリ此會議ニ於テ専ラ陸軍ニ関スル事ハ両国ノ陸軍委員ノミニテ協議スル事ニ決シタルヲ以テニコルソン中将ト談シ翌八日午後三時ヨリ開會スル事ニ決セリ

過日来平時ニ於テ陸海軍ノ指揮権ヲ協定シ置クノ必要ナキ意見ヲ漏シ置タル故此日ノ會議ニ於テハ別ニ論スル所ナカリシ

第二　陸軍會議

所定ノ時刻ヨリ諜報局ニ會合シ一同着席スルヤ安正先ツ発言シテ戦時英国カ極東ニ派遣スベキ軍隊ノ数如何ヲ質問セシニ事ハ実ニ意外ニ出シモノノ如クニテ問答ニ長時間ヲ費シニコルソン中将ハ英国カ世界ニ於ル位置形勢ヨリ説キ起シテ印度ニ於ル英露ノ関係ニ論及シ英国ハ単ニ極東ノ海上ヲ制シ得ルノミナラス世界ノ水面ヲ號令スルヲ得ルノ日ニ非レバ本国ノ陸兵ヲ遠ク海外ニ輸送スル事能ハザル所以ヲ詳述シ且ツ印度ノ形勢タルヤ外強隣ニ對スルト同時ニ内諸侯ヲ警ル等ノ困難アルヲ以テ到底戦闘ノ始メニ於テ陸兵ヲ極東ノ戦地ニ発遣スルノ難キヲズイ陳セリ此日ノ協議ハ実ニ胸襟ヲ開キ思ヒシヨリモ軍事上ノ秘密ヲ語リシモノト覚タリ且ツ會議ハ最モ圓骨ト好意トヲ以テ終レリ摘要則チ別紙ノ如シ

此協議書モ亦タ第一回ノ時ニ於ルカ如ク両国ノ委員ニ随伴セシ書記官タル将校ヲシテ草案ヲ筆記セシメ委員ニ於テ修正同意セ

シ後チ記名セシモノナリ此書ハ日英陸軍ノ為メ各一通ヲ製シタルノミ而シテニコルソン中将ハ全軍指揮官並内閣ニ報告シテ第一回ト同様ノ手続ヲ取ル筈ナリ

前述ノ如ク英国カ満州ノ作戦ニ軍隊ヲ発遣スル事容易ノ事ニアラザルヲ知ルヲ以テ本協議書ニ記シアル外数字ニ関スル秘密ハ避テ之ヲ陳ザリシ

英国ハ戦争ノ場合ニ於テハ亜富汗方面ニ對シテ有力ナル威壓ヲ為シ先ツ各方面ニ備ユル艦隊ノ力ヲ以テ防禦ノ薄弱ナル佛国ノ殖民地ヲ攻撃占領スルヲ第一ノ目的ト為スモノト思ハル故ニ安南東京ニ對スル作戦ニ我陸軍ノ援助ヲ希望シツツアリシハ曾テ宇都宮少佐ニ彼ノ作戦部長カ陳タル如クナリシガ極東ニ英軍幾何ヲ送リ得ルヤノ論始メニ出タル為メ竟ニ一言モ安南東京援助ノ事ニ及バザリシ

運送船ノ事ニ関シテハ第二回ノ協議書ニモ記シアル如ク力ラヲ尽シテ規畫スベキ事ヲ約セリ

此日竟ニ指揮権ヲ規定シ置ク問題出シモ歴史ヲ引證シテ豫メ之ヲ定メ置クノ必要ナキヲ陳シニコルソン中将之ニ同意シ臨機ノ處置ニ委スル事ト為セリ

満州ノ作戦ニ要スル日英共用ノ地圖並韓満及ヒ印度支那（佛領）ノ兵要手簿ヲ編纂スルハ英国ヨリ材料ヲ送リ越タル上方法ヲ定メテ着手スベキモノトス此事ニ関シテハ帰朝ノ上詳細陳述スベシ

右今回ノ協議ニ関スル経過ノ要領及報告候也

明治三十五年七月廿一日

陸軍少将　福島安正

参謀総長侯爵大山巌　殿

史料　三　日英軍事協商に関する参謀総長意見書

昨年龍動ニ於ケル日英両国陸海軍委員会議ノ協約ニ賛否ヲ表セントスルニハ先ツ英国ト同盟セシ目的ヲ稽ヘ次ニ其目的ヲ遂行スル方法ヲ推究セサル可ラス乃チ日英同盟ノ目的如何ト顧ミルニ其條約書ニ言明シ在ル如ク極東ノ平和ヲ維持シ清韓二国ノ独立ヲ助ケ日英両国ノ利益ヲ保全スルニ外ナラス此平和維持ノ為メニ日英両国カ提携協同スル所以ノモノハ他ニ此平和ヲ破リ独立ヲ危フセント慮ルノ国アルカ故ニナリ即チ其危害ヲ予防シ或ハ之ヲ排除セントスルニハ兵力ノ備ヘ無カル可カス而シテ各国ノ兵力ニハ互ニ長短アリ其長短ヲ相補フテ強大ナル一団ト為シ以テ其目的ニ反対スル国ニ当ラント欲ス是レ此同盟ノ精神ナリ

茲ニ日英両国兵力ノ長短ヲ比較スルニ英国ハ諸方ニ多ク属領及殖民地ヲ所有シ在ル為メニ優勢ナル海軍ヲ備フル必要アリテ凡ソ他ノ強大国二ヶ国ノ聯合艦隊ニ優レル艦隊ヲ擁セサル可ラスト言フ国是ヲ取レリ故ニ其海軍ノ優勢ナルヤ常ニ世界ノ海王ト綽号セラル然レトモ其陸軍ハ国家ノ情態及募兵法ノ関係等ニ因リ比較的頗ル寡弱ナリ我国ハ之ニ反シ海軍ハ世界各国艦隊中ニテ第四若ハ第六以下ニ位置スレトモ陸軍ノ声価ハ東洋ニ於テ稍々優勢ト認メラル是ニ由テ之ヲ観レハ極東平和維持ノ為メニ成立セル日英同盟ハ我陸軍ヲ以テ英ノ短キヲ補ヒ英ノ海軍ヲ以テ我ノ短キヲ補ハントスルニ在ルヤ復タ疑ヲ容レサル所ナリ抑々英モ亦久シク南阿ニ戦フタリ一朝清韓ニ事アラハ必ス多少ノ陸兵ヲ送遣シ協力スルコトナルヘシト予期シ在リシニ豈図ランヤ昨年ノ倫敦会議ニ於ケル両国委員ノ定メシ協約書ニ彼ハ此送遣ヲ約シ難シト明言セリ果シテ此ノ如キトキハ我国ノ負担更ニ重キヲ加ヘタリト謂フ可シ

翻ッテ清韓二国ヲ侵害セントスル敵国ノ意向ヲ按スルニ其一国乃至其聯合国ハ縦ヒ日英両国ノ艦隊ニ対抗シ得ル海軍ヲ有スルトモ妄リニ由来海王ト称セラレ在ル英国艦隊ニ向テ戦フノ愚作ヲ取ラス必ス陸上ヨリ侵襲シ来ルヘシ況ンヤ目下清韓二国ヲ侵害スヘク予想スル敵国ハ恰モ好ク陸地相接シ在ルニ於テヲヤ其ノ進路ヲ海上ニ取ラスシテ陸路侵襲ニ出ンコト地理ニ照ラシテモ亦明カナリ此時ニ方リテハ海ニ幾千ノ艨艟ヲ泛フルモ毫モ痛痒ヲ敵ニ与ヘス敵ハ自在ニ跋扈シテ恣ニ其略セント欲スル所ヲ取リ其為サント欲スル所ヲ行フヘシ若シ日英両国ノ陸兵寡弱ナルトキハ之ヲ傍観スルノ外復タ術策ナカル可シ故ニ鄙見ニ依レハ清韓二国ノ独立ヲ助ケ極東ノ平和ヲ維持スルニハ海軍ノ責任最モ重ク而シテ英国陸兵ヲ送リ得サルニ於テハ我国ノ陸軍独リ其重任ヲ負担セサル可ラサルナリ

現在及将来ニ向テ此ノ如ク重大ナル責任ヲ負担セサル可カラサル我陸軍ノ力ハ如何ニ日清戦役後直チニ拡張ニ着手セラレ爾来数年ノ拮据経営ニ因リ粗々完整セルモノノ如シト雖モ其完整タルヤ唯々外観ノミニシテ内容ハ未タ充実セス此不充実ナル陸軍ヲ以テ清韓二国ノ独立ヲ助ケ極東ノ平和ヲ担保セントスルコトハ当局者タルモノノ甚タ懸命ニ堪ヘサル所ナリ故ニ日英同盟ノ主旨ヲ貫徹セントスルニハ必ス先ツ我陸軍ヲ完備セサル可ラサルナリ夫レ日英同盟ノ目的ヲ攪乱セント予想スル敵国ハ従来大ニ東侵ヲ図リ莫大ノ経費ヲ投シテ増兵ニ要塞ニ鉄路（西伯里満州ノ鉄道ノ如キ北清事変直後急ニ其修築及改良ノ速度ヲ増加シテ完整シ得タルコト実ニ吾儕ノ意料外ニ在ルモノトス）ニ孜々汲々昼夜ヲ舎テス経営シ方サニ殆ント竣工シテ既ニ恐ルヘキ侵襲力ヲ有セリ此羽翼セル猛逋ニ当ラントスルニハ我カ今日ノ陸軍ハ其力未タ足ラス宜シク先ツ速ニ内容ヲ充実シ更ニ又拡張スル所ナカル可ラス右軍備充実ノ事タルヤ夙ニ感スル所アリ昨年既ニ陸軍大臣ニ請求シ同時ニ総理大臣ニモ移牒シタリ況ンヤ今英国ニ派遣セシ委員ノ復命ハ更ニ我陸軍ノ負担ヲシテ重大ナラシムルモノ有ルニ於テヲヤ故ニ英国提議ノ條件ニ賛成セント欲スルトキハ先ツ我陸軍ヲ能ク其重任ニ堪ヘ得ル如ク充実完備スヘキ成算ナカル可ラス

以上帷謀参画者トシテノ所見此ノ如シ内閣ニ於テモ深ク将来ヲ考慮セラレ以テ此意見ニ同情ヲ表セラレンコトヲ望ム

史料　四　応聘将校下士心得

一　応聘者ハ上裁ヲ経テ許可セラレタル者ナレハ其責任ノ重大ナル推シテ知ルヘシ又タ兵籍ノ何レニアルヲ問ハス当部専ラ其指揮監督ノ責ニ任スルハ当部ノ業務ト密接ノ関係ヲ有シ当部ノ意図ニ適フ如ク行動セシメントスルニアリ故ニ応聘者ハ当部ノ各員ト等シク国家要員ノ一人タルコトヲ忘ルヘカラス

二　応聘者各自ノ俸給ヲ廃止スルハ全ク欠員ノ補充上止ムヲ得サルニ出ツ又其応聘手続ニ於テ例式ヲ各自ノ志願ノ如ク規定シ之ヲ停年名簿ヨリ省除セルハ深ク外交上ノ関係ヲ顧慮シタルニ依ル故ニ可成秘密ノ精神ヲ失ハサルヲ要ス

三　軍事ニ関スル事項ハ勿論其地列国ノ行動若クハ時々発生事件ニシテ必要ト見認ムルモノハ当部ヘ報告ヲ怠ル可ラス且ツ要スレハ自己ノ意見ヲ具申スヘシ該報告進達ノ手続ハ海外派遣者報告規定ニ則トルヘシ

四　応聘者ハ外国政府応聘者内規第一〇条ニ規定シタル普通事件ノ外応聘上ノ業務ニ関スル重大ノ事項ニ付キテハ任意処決スルヲ得ス必ス総長ノ許可ヲ得タル後チニ於テスヘシ

五　数人ノ応聘者同一地ニアルトキハ進退願届報告其他諸種ノ請求等総テ高級故参者ノ手ヲ経テ進達スルヲ要ス又タ其高級故参者ハ其地ニアル将校下士ノ業務ノ成績素行等ニ付キ意見ヲ具シテ毎年二月盡日迄ニ到着スル如ク参謀総長ヘ報告スヘシ

六　凡テ契約書ニハ同一地ニアル高級故参将校及其所在地領事若クハ所管領事ト連名調印スルヲ要ス又タ調印後ハ其写ヲ参謀総長ニ呈スヘシ

七　応聘者其期限ノ解約継続若クハ俸給ノ変更等凡テ契約ニ属スル事項ニ就テハ右ト同一ノ手続ヲ履ムヘシ

八　契約日限ハ可成陸軍大臣応聘許可ノ日限ト相一致セシムルヲ要ス

応聘者ヲシテ緊要至急ノ情報ヲ当本部ニ電報セシムル為メ若干ノ通信費ヲ前渡シスルコトアルヘシ此場合ニ於テハ毎年三月盡日及九月盡日ノ両度決算報告スヘシ但可成任払ノ際ニ収メタル受領證書ヲ添付スヘシ

史料　五　　海外派遣者報告規定

一　海外ニ派遣ヲ命セラレタル者ハ凡テ総長宛ニテ報告ヲ出スヘシ

二　報告ノ受授ヲ確実ナラシムル為メ発送ノ書類ヘハ左ノ例（省略）ニ準シ送達紙ヲ添ユヘシ当部ニ於テハ主任者ヲシテ該紙ヘ捺印ノ上返却セシム

三　一地ニ数人派遣セラルルトキハ最高級故参者凡テノ報告ヲ取纏メ呈出スヘシ但シ特ニ各自ニ命セラレタルモノハ此限ニアラスト雖モ必其地高級者ヲ経テ進達スヘシ

史料　六　　将校下士ニシテ外国ニ招聘セラルル者ノ手続

一　外国ニ招聘セラレントスル将校下士ハ左式ノ例式（省略）ニ準シ願書ヲ所管長官ヲ経テ陸軍大臣ニ差出シ許可ヲ受クルト同時ニ本人ヨリ其写ヲ参謀総長ニ出スヘシ

二　招聘ノ為メ陸軍大臣ノ許可ヲ得タルトキハ左ノ例式（省略）ニ準シ出発届ヲ参謀総長ニ出スヘシ

三　出発後不在中ニ於ケル身元取扱ノ届書左ノ如シ（省略）

四　傭聘将校下士ニシテ本部ヘ出衙ノ際ハ其宿處ヲ総務部ヘ届出ツヘシ

史料　7　　別表8

露国戦時兵力概見表

参謀本部　第1部
明治36年2月調

兵種	軍管区	関東州	黒龍江	西伯利	トルケスタン	カザン	莫斯科	ドン	高加索	彼得堡	キーエフ	オデッサ	フィンランド	ウイリナ	ワルシャワ	総計
歩兵	軍団		2		2		3		2	3	5	2		5	5	29
	師団						7		4	6	10	4		10	11	52
	旅団	1	6	2	10	5	18		15	14	22	11	2	21	27	154
	連隊	4	20				28		48	28	44	20	8	44	65	309
	大隊	8	56	41	64	168	240		198	128	200	136	16	168	244	1,667
	人員	8,503	57,920	40,245	67,864	172,830	246,900		129,172	131,681	205,920	140,080	17,396	172,780	250,915 機4中412	1,642,618
騎兵	軍団														2	2
	師団				1		1		3	2	5	1		2	9	24
	旅団		1		4		3		6	5	10	2		5	18	54
	連隊	1	15	7	11	1	6	35	15	11	20	5	1	10	36	174
	中隊	6	87	42	57	10	37	249	89	65	120	37	8	60	218	1,085
	人員	973	14,446	7,945	9,392	1,634	6,235	41,061	15,232	10,506	20,148	6,215	1,279	10,120	36,680	181,866
砲兵	旅団		2		2	1	9		5	7	11	5		11	11	64
	連大隊	1	1		1	2	23		14	18	34	15	1	30	38	178
	中隊	3	21	8	16	24	102	14	71	52	117	59	4	113	110	714
	人員	970	6,191	1,968	3,898	5,604	24,628	2,940	16,025	12,461	27,033	14,201	932	25,288	25,603	167,932
工兵	旅団						1		1	1	1	1		2	1	8
	大隊		3		4		5		2	5	7	3		10	7	46
	中隊	1	13		16		24		8	19	24	10		48	24	187
	人員	307	3,322		4,161		6,539		2,274	5,352	6,889	2,876		10,338	6,897	48,955
人員計		10,753	81,879	50,158	85,315	180,068	284,302	44,001	162,703	160,000	259,990	163,372	19,607	218,526	320,507	2,041,181

史料　8　　別表9

黒龍軍管及関東州配兵表

参謀本部　第1部
明治36年2月調

兵種		黒龍軍管区																												合計	関東州					総計	
		西伯利　第1軍団　ニコリスク											同第2軍団　吉林・ハバロフスク									軍団外ノ諸団隊													平時	戦時
歩兵		東部西伯利狙撃歩兵第1旅団 ニコリスク　奉天				同第2旅団 ノボキエフスク				同第6旅団				計	東部西伯利狙撃歩兵第5旅団 ハバロフスク・ハルビン				同第4旅団 スパスコエ・吉林				計	西伯利予備歩兵第1旅団 チタ					計		東部西伯利狙撃歩兵第3旅団 旅順				計	52大隊・機関銃一中隊	64大隊・機関銃一中隊
		1連隊 奉天 ラズドリノエ	2連隊 金州 ニコリスク	3連隊 奉天 同	4連隊 同営 口	5連隊 ノボキエフスク	6連隊 同	7連隊 同	8連隊 フンチェンスキ	21連隊 バラバシ	22連隊 ニコリスク	23連隊 同	24連隊 ザイサノフカ		17連隊 ハルビン プラコエ	18連隊 ハバロフスク	19連隊 同	20連隊 同	13連隊 吉林 イマン	14連隊 ハルビン	15連隊 スパスコエ	16連隊 吉林 同		1大隊 ストレチンスク	2大隊 チタ	3大隊 ネルチンスク	4大隊 ビジンスキ ベルフネ			9連隊 旅順 機関銃一中隊	10連隊 旅順	11連隊 旅順	12連隊 大連湾			
大隊数	平時	8				8				8				24	8				8				16	1	1	1	1	4	44	2機1	2	2	2	8機1		
	戦時	8				8				8				24	8				8				16	4	4	4	4	16	56	2機1	2	2	2	8機1		
騎兵		烏蘇利騎兵旅団　ニコリスク													黒竜哥薩克騎兵連隊　ブラゴベシチェンスク									後貝加爾哥薩克チタ	2・3連隊 ベ・ビジンスキ チタ	1連隊3中欠 ネルチンスキ 奉天チタ	同2・3連隊	1連隊 アルグンスキ 伊通チタ	同2・3連隊		後貝加爾哥薩克 ベルフネビジンスキー 第1連隊					35中隊	93中隊
		沿海州竜騎兵連隊 ラズドリノエ 寧古塔		後貝加爾哥薩克チチンスキ第1連隊 ニコリスク 遼陽			同ネルチンスキ第1連隊ノ3中隊 グロデコフ 奉天			烏蘇利哥薩克騎兵大隊 ニコリスク 哈爾賓					第1中隊 ブラゴベシチェンスク		第2中隊 ブラゴベシチェンスク		第3中隊 エカテリノニコリスク																			
中隊数	平時	6		6			3			2				17	1		1		1				3			3		6		9	29	6				6		
	戦時	6		6			3			6				21	3		3		3				9	12	12	3	12	6	12	57	87	6				6		
砲兵		東部西伯利　砲兵　第1旅団　ニコリスク								後貝加爾哥薩克騎砲兵第1中隊 ニコリスク 遼陽				平時戦時 9中隊 70門	同第2旅団　ハバロフスク 長春								平時戦時 4中隊 32門	後貝加爾砲兵大隊（2中隊） 斉齊哈爾 ネルチンスク		後貝加爾哥薩克騎砲兵第2中隊（戦時3中隊ノ大隊） スパスコエ 伊通州		戦時特設 独立騎山砲 独立重砲 山野砲 砲中隊 中隊2門 中隊2門		平時3中隊 20門 / 戦時8中隊 56門	平時16中隊 122門 / 戦時21中隊 158門	東部西伯利狙撃砲兵大隊（3中隊） 旅順				平時戦時 3中隊（18門）	19中隊（146門）	24中隊（182門）
		1中隊 開原 ニコリスク	2中隊 ニコリスク	3中隊 営口 ノボキエフスク	4中隊 陶児州 ノボキエフスク	5中隊 ニコリスク	6中隊 ノボキエフスク	7中隊（山砲）寧古塔 ニコリスク	8中隊（山砲）吉林 ノボキエフスク						1中隊 長春 ブラゴベシチェンスク		2中隊 斉齊哈爾 同		3中隊 哈爾賓 ハバロフスク		4中隊 ハバロフスク																
工兵		東部西伯利　工兵　第1大隊 （4中隊ニシテ内1中隊ハ電信中隊ナリ） ハバロフスク　1中隊：奉天　2中隊：哈爾賓												平時戦時 4中隊	東部西利　工兵　第2大隊 （3中隊） ハバロフスク								平時戦時 3中隊	烏蘇利　鉄道　第1大隊（6中隊） ウラジオ						平時戦時 鉄道6中隊	平時・戦時 工兵：7中隊 鉄道：6中隊	関東　工兵中隊 旅順				平時戦時 1中隊	工兵：8中隊 鉄道：6中隊	

史料　9　　別表10

黒龍江軍管及関東州各地方戦時兵力概見表

参謀本部　第1部
明治36年2月調

兵種		区分	黒龍江軍管 西伯利第1軍団	黒龍江軍管 西伯利第2軍団	黒龍江軍管 軍団外諸団隊	小計	関東州	合計
歩兵	現役	大隊	24	16		40	8ト機関銃1中	48ト機関銃1中
		人員	25,200	16,800		42,000	8,400＋103	50,400＋103
	予備	大隊			16	16		16
		人員			15,920	15,920		15,920
騎兵	現役	中隊	17	3	9	29	6	35
		人員	3,000	535	1,470	5,005	973	5,978
	哥薩克帰休	中隊	44	6	48	58		58
		人員	740	917	7,784	9,441		9,441
砲兵	野（騎）砲	中隊	7	4	6	17(126門)	3(24門)	20(150門)
		人員	2,183	1,280	1,714	5,177	970	6,147
	山砲	中隊	2		1	3(18門)		3(18門)
		人員	612		259	871		871
	臼（重）砲	中隊			1	1(8門)		1(8門)
		人員			265	265		265
工兵		中隊	4	3	6	13	1	14
		人員	908	740	1,674	3,322	307	3,629
総計			32,643	20,272	29,086	82,001	10,650＋103	92,651＋103

史料　10　　別表11

西伯利軍管区配兵表

参謀本部　第1部
明治36年2月調

			西伯利豫備歩兵第2旅団 イルクツク				同　第3旅団 ヲムスク				合計 平時	合計 戦時	備考
歩兵		西部西伯利 狙撃歩兵 第一大隊 ザイマン	第五 豫備歩兵大隊 イルクツク	第六 豫備歩兵大隊 エニセイスク	第七 豫備歩兵大隊 クラスノヤルスク	第八 豫備歩兵大隊 トムスク	第九 豫備歩兵大隊 トボリスク	第十 豫備歩兵大隊 ヲムスク	第十一 豫備歩兵大隊 セミパラチンスク	第十二 豫備歩兵大隊 バルナウール	九大隊	四十一大隊	一 各豫備歩兵大隊ハ戦時五大隊ノ連隊トナリ他ニ補充大隊一個宛テ編成ス 二 豫備砲兵大隊ハ戦時二中隊編成ノ大隊四個トナリ第一ヨリ第四ニ至ル番號ヲ附ス
大隊数	平時	1	1	1	1	1	1	1	1	1			
大隊数	戦時	1	5	5	5	5	5	5	5	5			
騎兵		第三 連隊 ザイサン 西伯利哥薩克騎兵	第四 連隊 コクチェタウスク	第五 連隊 ヲムスク	第六 連隊 チュプスク ウルリエ	第七 連隊 ブレスノフスク	第八 連隊 パウロフスク ペトロ	第九 連隊 カメノゴルスク ウスチ アントニエフスク			六中隊	四十二中隊	
中隊数	平時	6											
中隊数	戦時	6	6	6	6	6	6	6					
砲兵		西伯利　豫備砲兵大隊　（軽砲） ヲムスク									二中隊	八中隊	
中隊数	平時	2											
中隊数	戦時	8											

西伯利軍管区　戦時兵力概見表

歩兵	現役	大隊	1
		人員	1,029
	豫備	大隊	40
		人員	39,216
騎兵	現役	中隊	6
		人員	1,135
	哥薩克休帰	中隊	36
		人員	6,810
豫備砲兵		中隊	軽 8 (64門)
		人員	1,968
合計			50,158

史料 11　　別表12－1

黒龍軍管区配兵表（関東州 → 次頁）

| 兵種 | 区分 | | |

別表12－2

関東州配兵表

参謀本部　第1部
明治37年1月16日調

兵種	区分										合計 平時	合計 戦時	総計 平時	総計 戦時
歩兵	軍団	東部西伯利狙撃歩兵									20 大隊・機関銃一中隊	20 大隊・機関銃一中隊	84 大隊ト機関銃一中隊	100 大隊ト機関銃一中隊
歩兵	旅団	第3				第7								
歩兵	所在地	旅				順								
歩兵	連・大隊	9 機一中	10	11	12	25	26	27	28					
歩兵	所在地	旅				順				二中海城 六中遼陽				
歩兵	大隊数 平時	8機1中				12								
歩兵	大隊数 戦時	8機1中				12								
騎兵	連隊	後貝加爾哥薩克　独立旅団									12 中隊		35 中隊	75 中隊
騎兵	連隊	大連湾												
騎兵	連隊	チチンキー第1				ベルフネウジンスキー第1								
騎兵	所在地	アヌーチノその他				大連湾　その他								
騎兵	中隊数 平時	6				6								
騎兵	中隊数 戦時	6				6								
砲兵	野（山）砲 旅団					東部西伯利狙撃砲兵大隊					4 中隊（30門）		25 中隊（196門）	30 中隊ト一小隊（230門）
砲兵	野（山）砲 所在													
砲兵	野（山）砲 中隊													
砲兵	騎砲 中隊	後貝加爾哥薩克騎砲兵第1中隊												
砲兵	所在地	ニコリスク 鳳凰城 内1中　遼陽				旅　　順								
砲兵	中隊数 平時	1				3								
砲兵	中隊数 戦時	1（6門）				3（24門）								

史料　12　　別表13

絶東派遣豫定露軍一覧表

参謀本部　第1部
明治37年1月16日調

軍団		第10（ハリコフ）				第17（モスクワ）				第3　西伯利				混成							会計
歩兵	師団	第9 キエフ			第31 ハリコフ	第3 カルーガ			第35 リャザニ	第2予備 イルクーツク			第3予備 オムスク		第54予備 ペンザ	第71予備 ペンザ	第60予備 ニージニノブゴロド	第78予備 ニージニノブゴロド	第58予備 カザーニ	第75予備 カザーニ		
	旅団	第1 ポルタワ	第2 クレメンチェグ		第1 ハリコフ	第1 カルーガ	第2 トウラ		第1 リャザニ	第1		第2	第1	第2							近衛狙撃 ヘチルブルク	大隊数：188
	連隊	33 ポルタワ	34 クレメンチェグ	35 クレメンチェグ	36 ポルタワ	121 ハリコフ	122 ハリコフ	9 カレーガ	10 カレーガ	11 トウラ	12 トウラ	137 リャザニ	138 リャザニ	5 イルクツク	6 エニセイスク	7 ヤクツクスク	8 トムスク	9 トボリスク	10 オムスク	11 セミパラチンスク	12 バルナウル												野戦兵：53,492
	大隊数	16				8	16			8	20			20	64				32		4		予備兵：137,424
	人員	24,690				24,690				39,216					65,472				32,736		4,112		
騎兵	師団	第10（ハリコフ）																	第1 モスクワ	オレンブルク・コサック第1大隊 カーメネボトリスク（キエフ軍管）		
	旅団	第1 スームイ		第2 ハリコフ		独立第2 アリョーウ													第2 ツウエリ			
	連隊	28 スームイ	29 アフトルイカ	30 チェグーエフ	第1コッサック ハリコフ	51 アリョーウ	52 エレツ												1 ツエフ	2 ルジエフ		
	中隊数	24				12													12	2		50
	人員	4,044				2,022													2,022	336		8,424
砲兵	旅団	第9 ポルタワ		第31 ペルゴロド		第3 カルーガ		第5 リャザニ														
	大隊	1	2	1	2	1	2	1	2												第4砲大隊 オデッサ	
	中隊数	6		5		6		5													3	25（200門）
	人員	3,300				3,300															900	7,500
騎砲兵	大隊	第10 チェグーエフ																				
	中隊数	2																				2（12門）
	人員	580																				580

備考

1. 明石大佐ノ報告ニ依レハ絶東派遣予定ノコサック大隊ノ誤ナラン　　部隊中「オレンブルク」コサック師団ナルモノアルモ「オレンブルク」

2. 川上貿易事務官ノ報告ニ依レハ騎兵第10　　師団ノ第28連隊ハ1月2日ウラジオニ到着シタルモノノ如シ

3. 明石大佐ノ報告ニ依レハ絶東派遣ノ目的此旅団編成ノ為南部露西亜ノ各歩兵連隊ノ　　ヲ以テ狙撃第9旅団編成ナルガ如シ（オデッサニ於ケル風説ニ依レバ毎小隊ヨリ3名宛ヲ取ルベシト言フ）

史料　13　　別表14

極東露国重要職員姓名一覧表

1904年3月
大本営参謀部調製

C	D	B	職名	階級	氏名	年齢
極東総督府			極東　総督	大　将	アレキシーフ	61
			参　謀　長	中　将	ジリンスキー	51
			参謀　次長	少　将	フルーク	44
満州軍司令部			軍　司令官	大　将	クロパトキン	56
			参　謀　長	中　将	サハロフ	51
			参謀　次長	少　将	ブラゴベシチェンスキー	50
西伯利第一			軍　団　長	中　将	スタルケルベルク	
			参　謀　長	少　将	イワノフ	52
	歩兵第一		師　団　長	少　将	ゲルングロース	51
		歩兵	第1旅団長	少　将	ルトコブスキー	
			第2旅団長	少　将	マルギモビッチ	
		砲兵	第1旅団長	少　将	ルチコフスキー	51
	歩兵第二		師　団　長	少　将	アニシモフ	54
		歩兵	第1旅団長	少　将	アセエフ	
			第2旅団長	少　将	シュピンスキー	
		砲兵	第2旅団長	少　将	チュコフ	
西伯利第二	（6D欠）		軍　団　長	中　将	ケルレル	
			参　謀　長	少　将	ハーヘングート	
	歩兵第五		師　団　長	少　将	アレキセーフ	53
		歩兵	第1旅団長	少　将	オクリチ	
			第2旅団長	少　将	プチロフ	
		砲兵	第5旅団長	大　佐	ジュブリュスク	

C	D	B	職名	階級	氏名	年齢
西伯利第三	（9D欠）		軍　団　長	中　将	ステッセル	56
			参　謀　長	少　将	ロズナトフスキー	47
	歩兵第三		師　団　長	少　将	カシタリンスキー	55
		歩兵	第1旅団長	少　将	マルダノフ	
			第2旅団長	少　将	ストリップ	
		砲兵	第3旅団長	大　佐	シュウエリン	
	歩兵第四		師　団　長	少　将	フォーク	61
		歩兵	第1旅団長	少　将	アンドロデビギングリャット	
			第12旅団長	少　将	ナデイン	
		砲兵	第4旅団長	大　佐	イルマン	
西伯利第四			軍　団　長	中　将	ザルバエフ	60
			参　謀　長	少　将	ウエーベル	
	歩兵第二		師　団　長	少　将	レウエスタン	57
		歩兵	第1旅団長	少　将	プレシュコフ	
			第2旅団長	少　将	オガノプスキー	
	歩兵第三		師　団　長	少　将	コソイッチ	56
		歩兵	第1旅団長	少　将	シリイコ	
			第2旅団長	少　将	レビンデル	
五			軍　団　長	中　将	ダンボフスキー	
六			軍　団　長	大　将	ゾーボレフ	
黒龍　軍管区			司　令　官	中　将	リネウイッチ	
西伯利軍管区			司　令　官	中　将	スホーチン	

Ⅱ　資料

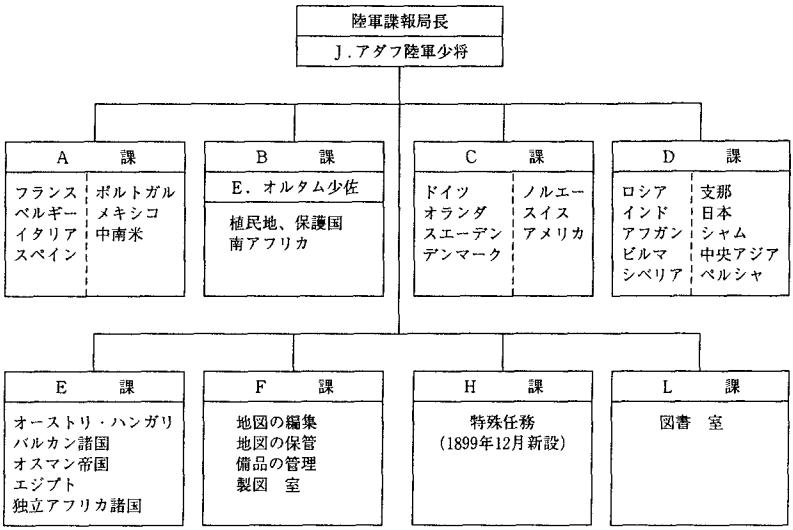
資料　1　　英国陸軍諜報局関係資料

付図１　英陸軍諜報局（Intelligence Division）組織図（1896-1901）

付図２　英動員・陸軍諜報局（Department of Mobilization and military Intelligence）組織図（1901-1904）

出　典　Thomas G. Fergusson, *British Military Intelligence, 1870-1914; The Development of a Modern Intelligence Organization* (London, 1984).

英陸軍諜報局（Intelligence Division）組織図（1896-1901）　付図 1



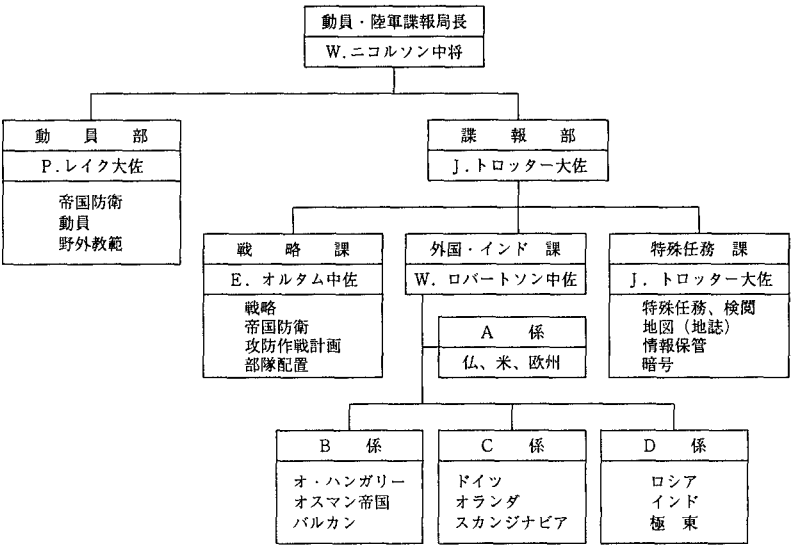
所在地：諜報局が動員・陸軍諜報局に改編された1901年11月までは「第16・第18アン女王ゲート」その後、Winchester House（St. James Square）へ移転。

隷　属：陸軍諜報局長は当該期間、最高司令官に直属し、陸軍評議会のメンバーではなかった。

陣　容：正確な数字は不明。諜報局の総員は南アフリカ戦争前、約45名（長期勤務将校18名）。各課長は当該期間、参謀次長補佐官付で、少なくとも参謀大尉1名がその補佐として配属されていた。

英動員・陸軍諜報局（Department of Mobilization and military Intelligence）組織図（1901-1904）

付図　2

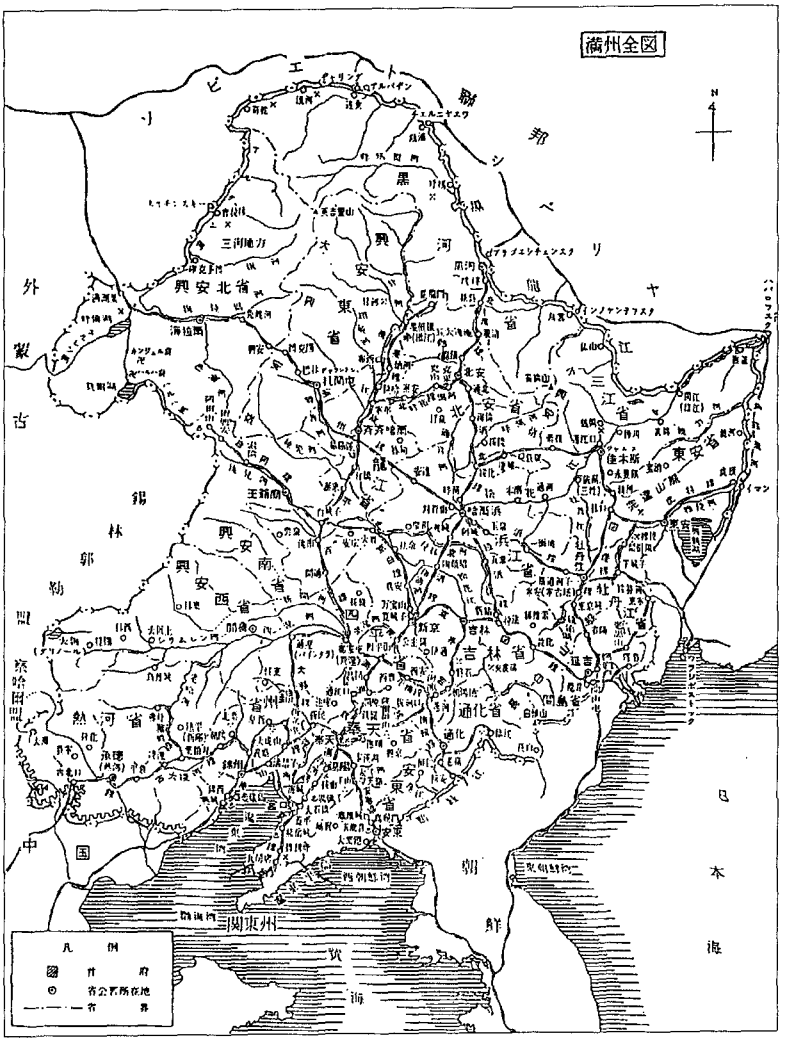


所在地：Winchester House (St. James Square)、但し、動員部を除く。

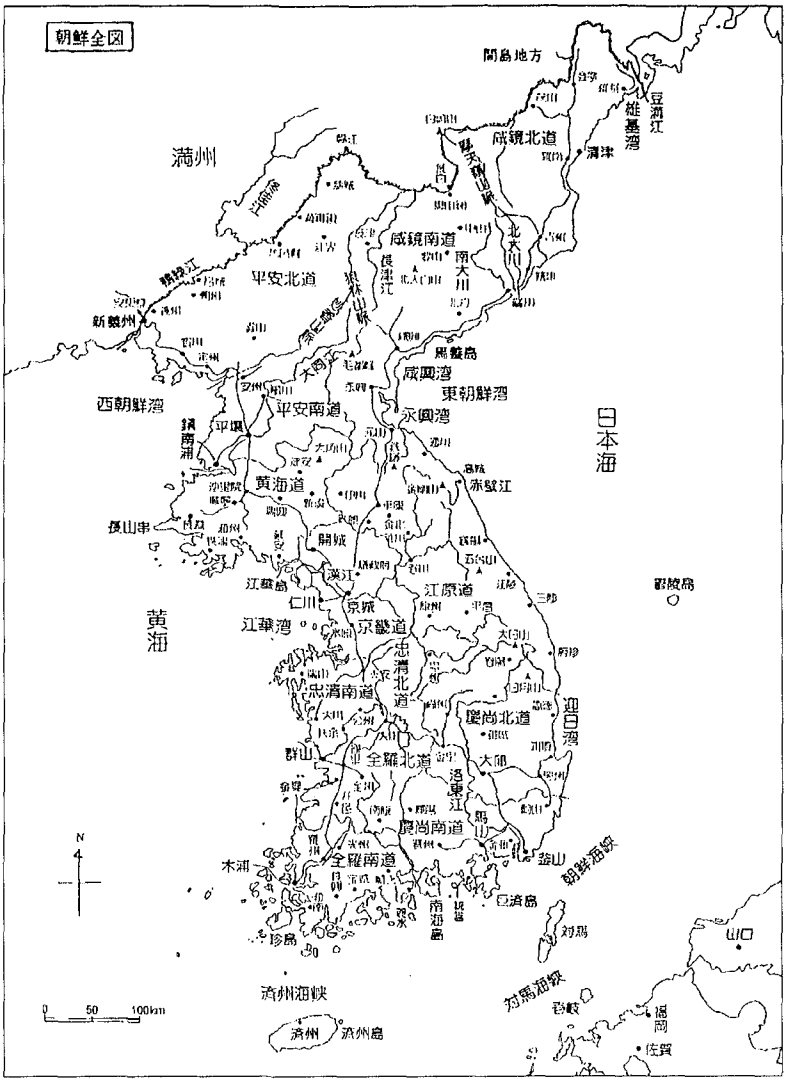
隷　属：動員・陸軍諜報局長は最高司令官および戦争担当大臣に直属し、、陸軍省評議会のメンバーであり、内閣防衛委員会の会議に出席した。

陣　容：1903年、77名が同局に所属し、将校は33名（長期勤務20名、出仕13名）であった。軍属25名は全て、特殊任務課の製図工、地図・図書整理係として勤務していた。

資料　2　　満州・朝鮮各全図



出典　加藤豊隆『満州国警察小史』〔第一法規、1968年〕



出典　『日本植民地史・朝鮮』〔毎日新聞社、1978年〕